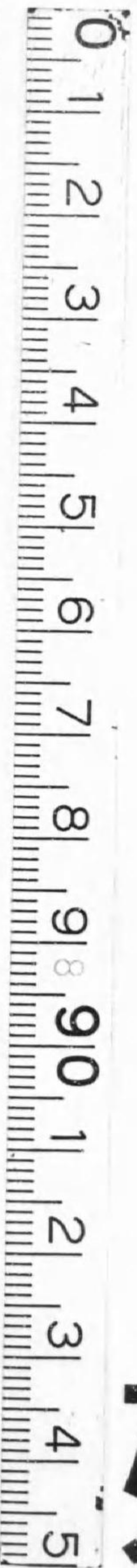


特218

762  
第三版

新體制と自我奉還

大日本日の丸會刊



始



特218  
762

483



新體制と自我奉還



大日本日の丸會謹作



此の書を一億忠誠心に

信賴される

東條首相に捧ぐ

昭和十八年二月十一日

御像は編者が社会事業の功勞賞として、昭和十五年十月十日、厚生大臣より授與されたもので、名工日名子實三氏會心の謹作ですが、不思議な事には、其日承詔必謹自我奉還の金言五十枚を、近衛首相宛にて、翼賛會幹部初會の方々に御贈りいたしました。此の間には何か神祕のものがあると思はれましたので謹載いたしました。

昭和十六年三月六日

勅語

明治天皇

明治二年四月二十日  
大政官日誌

朕、嚮ニ汝百官群臣ト五事ヲ掲ケ、天地神明ニ質シ、綱紀ヲ皇張シ、億兆ヲ綏安  
スルヲ誓フ、然ルニ兵馬倉卒、未タ其績ヲ底サス、朕夙夜上ハ以テ神明ニ畏レ、  
下ハ以テ億兆ニ慙ツ。今ヤ乃チ親臨、汝百官群臣ヲ朝會シ、大ニ施設スルノ方法  
ヲ諮詢ス。是レ神州安危ノ決今日ニ在リ、誠ニ宜シク腹心ヲ披キ肺肝ヲ表シ、可  
否ヲ獻替スヘシ、朕將ニ勵精竭力、大ニ經始スル所アラントス、汝百官群臣ソレ  
勗哉。

詔書

朕惟フニ神武天皇惟神ノ大道ニ遵ヒ一系無窮ノ寶祚ヲ繼キ萬世不易ノ丕基ヲ定メ  
以テ天業ヲ經綸シタマヘリ歷朝相承ケ上仁愛ノ化ヲ以テ下ニ及ホシ下忠厚ノ俗ヲ  
以テ上ニ奉シ君民一體以テ朕カ世ニ逮ヒ茲ニ二千六百年ヲ迎フ今ヤ非常ノ世局ニ  
際シ斯ノ紀元ノ佳節ニ當ル爾臣民宜シク神武天皇ノ創業ニ嚮セ皇圖ノ宏遠ニシテ  
皇謨ノ雄深ナルヲ念ヒ和衷戮力益々國體ノ精華ヲ發揮シ以テ時艱ノ克服ヲ致シ以  
テ國威ノ昂揚ニ勗メ祖宗ノ神靈ニ對ヘンコトヲ期スヘシ

昭和十五年二月十一日

御名 御璽

一、微臣謹みて、此の書を憂國の士にお贈りいたします。

一、大日本日の丸會は、日本民族を一九とする會名で、一人の會員も募集いたしません。

一、此の小品は昭和の時代が産み出しましたもので、執筆者は只編纂のお役をいたしましたばかりでございます。

### 増補第三版のことば

此の書新體制と自我奉還、第一篇は昭和十六年の初版、第二篇は昭和十七年の増補再版にて、本著は昭和十八年の増補第三版であります。編輯せる内容は關西の三大新聞、愛讀の國教、反共情報、生長の家、文化日本、帝國教育、日本教育、並に數冊の著書より拜借いたしましたもので、自作の個所は殆んどありません。故に謹作したものでなく、謹作させていたゞいたもので、時代の産み出した作品であります。只無知短才なるため、木に竹を接ぎたる所多く、折角の名文や深遠なる高見をして、曲解せる過失なきやを恐れてゐるのであります。殊に大詔の奉戴聖旨謹載に至りましては、畏れ多き極みであります。微臣三十有餘年間の確信を堅持し、今日の隆々赫々たる國運の盛大時に生を稟けたる光榮に對して、皇恩の萬一に報い奉り、又第一線に苦闘奮戦せらるゝ勇士に感謝し、併せて護國の英靈に合掌し、傷痕軍人諸賢の再起御奉公を祈り、以て銃後の一億同胞と共に自我奉還の臣民道を實踐いたし、日本民族の絶對使命

二  
遂行に一點の閃めきを與へ得ますれば無上の欣幸とする所以であります。此の小著幸にして初版千部は、畏友先輩に批正を求めましたが、思はざる感謝感激の御言葉をいたゞき、再版千部は貴衆兩院の全閣下諸賢に献本贈呈いたしました。之亦過分の讃辭を受けましたので茲に復増補第三版千部を刊行し、壹億一神以て地上淨化の一役に御間に合せたく、謹みて世の識者諸賢に高教を仰ぎたいと存じます。一言燕辭を述べて第三版の御挨拶といたします。

昭和十八年二月八日

編者謹記

## 新體制と自我奉還

### 目次

#### 第一篇

一、はしがき	一
二、金言の構成	三
三、昭和の新體制と自我奉還	四
四、新體制と翼賛會	七
五、翼賛會と自我奉還の情勢	一〇
六、文献に表はれたる自我奉還の精神	一五
七、自我奉還とは	一八
八、御垂示	二三

目次

一

目次

九、臣道實踐……………二六  
 一〇、結び……………三三  
 一一、提唱……………三五

第二篇

一、丹後元伊勢……………三九  
 二、聖範……………四〇  
 三、政變……………四五  
 四、翼賛會の活躍……………四七  
 五、一億臣民の心境と自我奉還……………五〇  
 六、祈りの生活……………五八  
 七、神の法廷太平洋……………六〇  
 八、世界の新秩序建設……………六二

第三篇

一、御親拜と其の謹話……………六九  
 二、聖戰と戦争……………七七  
 三、神の化神と諸勇士……………八四  
 四、必勝政治の確立……………九三  
 五、文武一如と教育刷新……………九五  
 六、國教制定の機熟す……………九七  
 七、三たび自我奉還を説く……………一〇一



## 第一篇

### 一、はしがき

紀元二千六百年といふ曠古の大盛典が行はれました昭和十五年は、一億の民草が永久に忘るる事の出来ない、有りがたい年でありまして、何人も何かをして御國のためにさげねばならぬと、誓はぬものはなかつたのであります。私も此の慶祝の年に際會いたした幸福を記念するために、何かを考へてゐたのであります。新體制といふ聲がさげばるゝに至つて、フト氣づいたのが自我奉還といふ金言でありました。フト氣づいたといふものゝ近衛公提唱の、大政翼賛運動が開始され、聖徳太子承詔必謹の聖語發表に示唆されたのであつて、昭和十五年九月十八日、承詔必謹自我奉還の金言となつたのであります。爾來接する人毎に語り合へば、之れで新體制の意味が判つたなどと悦ばれる人もありまして、謹作者たる私には一層意味の深重なる事が痛感されましたから、手許に這入る十餘種の月刊雑誌や、大朝・大毎・日出等の新聞に

より内容の意味付をいたし何かの御役に立てばと思ひ小品といたしました。何といつても世界大動亂の渦中、人類生活の大轉換期に遭遇せる我國情は、恰も徳川幕府鎖國の夢破れ、明治維新が國內統一の爲めに大政が奉還された如き状態であつて、爾來七十餘年海外の諸相氾濫し、支那事變前には男が女になり、女が男に變はる變調さへ來し、佛者のいふ末法の世となり、何とかならねば、何とかしなければとは、憂國の士が天下の憂に先つて憂ひてゐた程で、思想混亂の結果は個人個人が、幕府のやうな状態であつたが、其間にも肇國の理念研鑽者は、日本民族の絶對使命を忘るゝ事なく、時の到るのを俟つてゐたのである。否時を作らんとしてゐたのである。之れが新體制であつて、昭和の新體制は國內統一のみでなく、世界を日章旗化する爲めに、巨歩の第一歩を踏み入れたのであるから、一億民が自我奉還の心境に入る事は自然の現象なる事を提唱するのであります。之れによつて國內は統一され、外交は強化され、世界は平和の福祉に恵まれ、地上は天照大御神の照覽し給はぬ所なきに至るのであります。今や世界人類は之れを自覺するやうになりつゝあるのであります。故に我國の現代は自我奉還の時代なりともいひ得るのであります。

## 二、金言の構成

承諾必謹自我奉還の構成は、昭和十五年八月二十八日近衛内閣總理大臣の新體制に對する聲明の一節に、「萬民翼賛の意思に於て異なるものありとすれば、それこそ聖斷を仰ぐべきであり一たび聖斷の下されたるときは、凡ての臣僚が承諾必謹の大義に歸一する事が日本政治の眞の姿でなければならぬ」との發表によるものであつて、此の出典は、聖徳太子の十七條憲法の第三に依るものであつて、

詔を承りては必らず謹め、君を則ち天とす、臣をば則ち地とす。天覆ひ地載す、四の時順り行き萬の氣通ふことを得。地天を覆へさむと欲るときは、則ち壞を致さまくのみ。是を以て君言ふときは臣承る、上行ふときは下靡く、故れ詔を承りては必らず慎め、謹まらずは自らに敗れなむ。

とあるに則りたるものでありまして、自我奉還とは畏れ多い事ですが、不肖謹作いたし一條の金言となつたのであります。

然らば自我奉還とはどういふ事でせうか、之れは明治維新の際賢明なる徳川慶喜公が、四圍の情勢を洞察し、慶應三年十月十四日、高家大澤右京大夫基壽を使として、政權並に位記返上の事を奏上せられた。其上表に曰く

臣謹て皇國時運之沿革ヲ考候ニ、昔シ王綱紐ヲ解テ、相家權ヲ執テ保平之亂、政權武門ニ移リテヨリ、祖宗ニ至リ、更ニ寵眷ヲ蒙リ、二百餘年子孫相受、臣其職ヲ奉スト雖モ、政刑當ヲ失フコト不少、今日之形勢ニ至候モ、畢竟薄徳之所致、不堪恐懼候、況ヤ當今外國之交際日ニ盛ナルヨリ、愈朝權一途ニ出不申候而者、綱紀難立候間、從來ノ舊習ヲ改メ政權ヲ朝廷ニ奉歸、廣ク天下之公議ヲ盡シ、聖斷ヲ仰キ、同心協力共ニ皇國ヲ保護仕候得ハ必ス海外萬國ト並可立候、臣慶喜國家ニ所盡是ニ不過ト奉存候、乍去猶見込之儀モ有之候得者、可申聞旨、諸侯へ相達置候、仍之此段謹テ奏聞仕候以上 詢

十月十四日

慶喜

### 三、昭和の新體制と自我奉還

近衛公が一ヶ月輕井澤に籠居され、新聞人も國民もどうしてゐられるのであらうか、天岩戸に閉ぢ籠られたやうな氣持で、待ち構へてゐたのであるが、其間に御祖先や御子孫の事も考へられたであらうが其一ヶ月間こそ靈人の心境にゐられ、自我奉還の眞理を悟られたのに違ひない。七十年前には大政奉還により國內の統一が行はれ、今は世界日章旗化に着手する時であつて、二千六百年の聖史は、筆紙に盡し難き秘史艱難の生活面がある事も考へられ、世界の救主と仰ふぎ奉る 聖天子の爲めに萬民翼賛の赤誠を盡すは此の秋なり、今——今こそ空前絶後の好機一刻を逸しては悠遠の聖史に對して申譯なしとの一鐵心、幸に國民の信望を擔はれたる公茲に金的を射られたのが新體制だつたのだ。それならばこそ效罪半ばする政黨の解消、官僚獨善の反省、軍務の一致を見るに至つたのである。然らば其新體制とは何か、世間には新體制とは何か新しい事をいひ、變つた事をして、古いものは何でもかでも捨て、仕舞ふ、財産も皆返上して仕舞ふと、百八十度の轉向の如くに思ひ込んで、赤の思想と混同して心配してゐる人さへあるやうである。さうかと思ふと新體制とは眞體制で新とは何事だ、又新體制とは神體制だといつてゐるものもあるが、新體制は新體制でよい、新體制といふ事は、宇宙の創造された

時が新體制なのであつて、天御中主命が天地を造り給ふた、それが一番最初で幾十萬年後の今日は最も古きもので、其國土型成より今日まで生々發展し、日本民族は神武天皇の八紘一宇の御經綸遊ばされて二千六百年の古きに互り、本年は一年古くなつて行くのであつて新體制は舊體制なのである。

さて二千六百年といふ星霜には、支那の道教や儒教が輸入し、印度の佛教歐洲の基督教が渡來し、是等より多くの榮養素を取り入れて今日になつた。是等海外文化の輸入は、善い事ばかりではなかつた。其裏面に附着してゐる塵埃も共に取り入れて、絶對者の理念にあらざる不純物まで取り入れた。之れが資本主義・個人主義・自由主義・共產主義といふやうな容相をして浸入し、隆國の理念をくらす煙幕であつた。危い哉危機一髪。紀元二千六百年といふ慶祝の年は、日本民族本來の面目に立ち歸つて地上の淨化を計るにはどうしても神の懷に抱かれねばならぬ、それには天照大御神の御神徳に歸らねばならぬといふ事を悟つたのである。故に新體制といふ事は宇宙創造の最新體制に、あらゆる榮養素を吸収して、生々發展して來た眞髓を生かし、不純物を取り去つて世界の平和を實現しようといふのにある。であればこそ近衛公も昭

和十五年十二月十四日農民に告ぐるといふ題目の下に、農村青年に放送されて、新體制といつた所で、今までのものを悉くひつくり返して全く新しい組織で組立てようとするものではない。今までのやり方の中で悪いところを改めて、日本がもつとよくなるやうに仕向けて行く事はもちろんであるが、併し其根本の觀念に於ては別に新體制と申すほどの目新しいものではない。否むしろ精神に於ては昔ながらのものであると、私は申したい。

#### 四、新體制と翼賛會

新體制について二荒伯の説を窺へば、古代精神の凝り固つて一に正しきを培ひ、二に歡を積み、三に光を重ねるのであつて、今日世界情勢の巖頭に立つて、日本最後の勝利を期して、個人の安逸を排し私利を考へぬ、若人を作らねばならぬのであつて、新體制とは義務ではない、日本民族の血の欲求である。

井田盤楠男の熱誠あふるゝ聲明によれば、新體制とは國民の一人々々が正しい思想理念にもとづいて、各々の職場に倒れる迄頑張る事で、新體制の中には、高度國防國家の建設のために

最高の經濟文化が稱へられてゐるが、最も大切な思想國防の意義を忘却してゐる。之れはアメリカよりもソ聯よりも恐るべき事である。建武中興を見よ、明治の維新を見よ、あれだけの大改革にも國民は少しも崩れてゐない。今假りに昭和維新が出来て、歴史家が昭和維新といふかどうか知らないが、楠公はなくとも、吉田松陰が現はれなくとも、全國民が一身同體となつてよくやれたものだと思ふ程のものを創り上げるには、まだ億兆一心が足りない。この意味から翼賛會は國民の世話である。斷じて指導者であつてはならない、國民の力は國民の各々の職域奉公こそ大切だ、これを御世話する所に初めて大政翼賛會の使命があるのだ。

尙慨世の志士秋田子爵は、新體制は社會主義の平等や國家社會主義的政策も、このまゝ皇道國家に實現しようとするのであつてはならない。と誠められてゐるが、大いに自肅自誠を要するのであります。

さて以上の如き意味に於て、新體制は翼賛會を生み出したのであつて、前述の如く明治維新は大政奉還によつて國內が統一されたが、昭和の維新は自我の奉還によつて、世界平和の實現に一步をふみ入れたものと思ふのであります。此の意味が理解せられなければ、翼賛會の目的

は達成し得られないのである。又さうでなければ五ヶ年間の物心の犠牲に申譯がない、尙今後長期に亙りて何の據り所があつて繼續しられようか、石原師團長の言葉の如く、日本の武力戰の停止の時は絶對的世界平和の時であると。斯の如く明らかなる理由あるにも拘はらず、翼賛會とは何をする所だらうと迷つてゐる人も多いやうである。故に茲に身勝手な説明かも知れないが、政府は表翼賛會は裏、政府は男性翼賛會は女性、政府は夫翼賛會は妻、即ち女房役といふ關係であつて、尙換言すれば政府は君臣の義を明らかにし、翼賛會は父子の情を温めるといふやうな意味ではなからうか。一例をあげて見れば、茲に米の統制が行はれ、農民に所有米の全部を提出せよと命ぜられる、さうして昨日まで一日六、七合も喰つてゐたものが、俄に一日に二合か三合にせよといはれる。それでは農民は働けない、外の事は兎に角、喰ふ事だけは辛抱が出来ないといふので全部の提出を見合せたが、警官の家さがして貯蓄米を見付けられた。農民は豚箱に投げ込まれ青年は結束して立つた、事は重大にならうとする。そこで救ひの手は、伸ばされ事は圓滿にをさまり、一人も所を得ないものはないやうにと、もしこんな事があつたとすると茲に翼賛會の女性的世話人としての生命があるのではないでせうか。斯の如く翼賛會

は國民生活を安全ならしむるに痒い所に手が届くやうにするのでなからうか。

## 五、翼賛會と自我奉還の情勢

さて翼賛會に於ける自我奉還の情勢はどうであらうか、昭和十五年十二月十六日より三日間東京の大政翼賛會中央協力會議に於て、各職域代表者百五十名が參集され、盛り澤山な議題が論ぜられたが、下意上達の底意を示すとあつて、眞剣なる論戦が闘はれたのは誠に有りがたい事であつた。何れも自我奉還の精神より出で、翼賛會の將來に取つて頼もしき事であつた。之れも翼賛會の實踐要綱第一に臣道の實踐に挺身す、即ち無上絶對普遍的眞理の顯現たる國體を信仰し、歴代詔勅を奉體し、職分奉公の誠をいたし、ひたすら惟神の大道を顯揚すといふにありて、津田信吾氏が新體制に要望していはれるには、翼賛會實踐要項中に、臣道實踐に挺身すとあるは至極同感である。この精神は一旦緩急あれば義勇公に奉ずる教育勅語に盡きてゐる。支那事變勃發以來四年になるが、未だ國內が動搖せざるは、御稜威によるは勿論の事、國民一般が此の勅語の御精神に副ひ奉つて、舉國一致協力せる賜である。財界人は今や來るべき運命

を甘受すべく覺悟してゐる。我々は笑つて死んで行きたい念願を持つてゐる。この覺悟は軍人たると民間人たると相違はない。

國民たるもの臣道實踐に挺身する以上、閣僚大臣をはじめ官吏自ら率先して、挺身の實を擧げねばならぬと思ふが如何。強權をもつて國民に臨むがよいか、和衷協同もつて國民に臨むか何れの氣持をとるか。經濟新體制確立に當つて民間の創意を尊重すべきと思ふが、民間の創意はやゝもすれば無視せらるゝ實情である。事變の進展につれ、優秀産業に重點を集中し弱小産業を整理する主義が採り上げられてゐるが、これは誠に由々しき大事である。我國産業の中心が、中小工業にある事は論を俟たぬ。かゝる考方はものに偏重し、ものゝ實體を知らざるもの考へである。工場は設備にあらずして人である、會社は如何に規模が大でも經營者が劣等なる場合はこれを叩き潰さねばならぬ。しかるに人的機構のよい、しかし規模の小さい弱小會社を潰さんとするは、わが國の精神と絶對に相容れぬ、ものごとは規模の大小をもつて論すべきでなく、無暗に産業編成替へをするのを革新意識と考へるは大なる誤りで、もしこの方針を押せば將來我國は少數の富豪と大多數の貧乏人ばかりが残るのみ、當局の所見如何と論陣を張ら

れ。

郷隆氏は生産の飛躍的増強は、國防國家建設上缺くべからざるもので、物質動員・智能動員以外體力動員が絶対必要である事を看過してはならぬ。物資智能體力の三大動員を一大目標に進まねばならぬ、理論的指導や僅かな事務的指導によつて體力増強が圖られると考へるのは誤りである。翼賛會が該問題を取上げられるが、その影響する所大である。生命奉還の觀念は戦地に赴き、銃を執るもののみにあてはまるのではない、國民全體に滲透せねばならぬ、生命奉還を翼賛運動の中核として明示されたい。今日政府の行つてゐる體力行政も、文部厚生兩省に分れて判然としない、翼賛會も組織でやるのか指導部でやるのか、又別の機構を設けるのか不明である。政府の轍を踏まぬやう善處されたい。又體力増強と並んで重大なる事は、休養と娛樂である。明朗なる氣風涵養に努力せねばならぬ。と生命奉還の信念を絶叫され。

加藤完治氏は熱血あふる、言行一致の體驗を、農村振興の根本が、農民の自覺にある事は事實である。農村の臣道實踐は農民がその耕作に精を出すこと以外にない。肥料や農具の配給も大切であるが、根本は農民の勤勞精神である。然るに今日これを阻害する事實がある。例へば

農繁期に講演會や訓練演習等をやき事は農村の勤勞を妨げるものである。翼賛會は之れを改めねばならぬ。と語られ良民の生命を活かされた。我々翼賛會の健實なる發展を希ふものは、十分の感謝をさへげた譯であつて、末次議長の閉會の挨拶の通りである、曰く

臨時中央協力會議は、時局の必要上匆々に開會せられ、各方面の準備が一般に行き届かなかつた事は各位の親しく御覽になつた通りであるが、本會議の重點が翼賛運動の主旨の徹底、ならびに全國各地方および各階層の忌憚なき實情を承るところにあつたので、この目的さへ達すれば、本會議の使命は一應達せられたと申しても敢へていひ過ぎではないのである。しかるに會議の實際に臨んでみると、僅か三日間の會期を以て百六十餘件に及ぶ極めて重要な議案を議了し、重點をおかれた議題以外にも、政治經濟文化および國民生活の各部門にわたつて極めて有益なる検討がとげられた事は、實に望外の收穫といはねばならぬ。これ一に會議員各位の時局に對する徹底せる認識と、燃ゆるが如き愛國の至誠の賜ものである、いはゆる正氣ときに光を放つものと申すべきであらう。と

以上の如く今回の主たる翼賛幹部は、近衛公や有馬伯の範に習はれて、全く自我奉還の方々

である。だからこそ現状の日本を救ひ、世界の轉換期に貢献し得るのである。之れが又第七十六議會に反映して來た事は誠に慶賀に堪へない次第であつて、首相の演説中には自我功利の思想を排してと述べられ、尙十六年一月二十八日衆議院豫算總會に於て、三宅氏の質問に對する首相の答辯は、國民の感激措く能はざる所であつて、國民一般も此の肚がなければならぬ。

近衛公　お話の如く支那事變は第一次近衛内閣の當時勃發したのであります。爾來今年は第五年を迎へてをります。なほ事變は解決の曙光を見ません。これは軍部の責任でもございませぬ、誰の責任でもありません、全く私の責任です。すでに巨億の國帑を費し十萬の將兵が大陸に骨を埋めたといふ事は上　陛下に對し奉り、下國民に對して誠に相濟まぬと思つてをります。

支那事變の解決をみざる今日、さらに時局は重大を加へまして、この未曾有の難局に直面し　聖上陛下の日夜々の御軫念を拜察いたしましたして、眞に恐懼の極みであります。かくのごとき御軫念を拜察しました事變以來の私の責任を顧みますると、甚だ微力無力なる私であります。陛下の御信任を忝うしてゐる限り、これは最後の御奉公いたすつもりであります。

ます。

## 六、文献に表はれたる自我奉還の精神

帝國教育會昭和十五年十二月號に、河原春作氏の、式典に參列してと題して、

去る十日式場に參入する途すがら、御濠のそばを通つたのであります。幾百とも數知れぬ若鯉が、先達とおぼしき鯉に導かれて、或は圓く或は縦に或は横に列をなして愉快げに遊び廻つてゐました。其式場に於て大君の出御を待ちたてまつつてゐるうちに、千代田の宮の松の梢から大空高く、鳶が舞ひあがりました。金鵝の祥瑞や御濠の游魚のことなど思ひあはせ、「鳶飛戾天、魚躍干淵、豈弟君子、遐不作人」と聖王の徳をたゞへた、古人の句が事實に眼前に髣髴たるを覺えたのであります。人類のみならず、鳥や魚まで所を得しめんとするが、八絃一字の理想であり、新體制の趣旨でありませう。やがて莊嚴のうちに聖勅は渙發されたのであります。この時こそ我國の各階層の代表者が肅然として襟をたゞし、我を忘れて玉音の御一句御一句に全靈をそゞぎ集めた時であります。五萬の衆庶は今までの生涯に於てこの時ほど清淨純眞



にして敬虔なる無我の境地におかれたことはいでありません。

かゝる尊き光榮ある體驗を持たれた人の心境こそ自我奉還の精神は満々たるものがあつて、日本の將來も頼もしく目出たい事でありませう。次に

靈人谷口雅春師は、生長の家第十輯第一號二十頁に、

われなきが日本人なり、主格を忘れて發音する日本人の言語の多きを見よ、往つてまゐります、これから勉強いたします、頂きます等々無數なり。爲すものなくして爲し、働くものなくして働き、觀るものなくして觀るが日本人なり。個人なきなり。宇宙全體と俱に生きてあるなり、これを惟神と云ふなり。惟神の惟はタゞと云ふ字なり。惟神のみ在しますが惟神なり。公益優先など云ひて言論コトバせずとも、そのまゝ公に融合せるが日本人の生活なるなり、私益に對立せしめ公益は私益に優先するといふ外來熟語によつて惟神のみありと認めたる日本人の生活を、人爲的に計られざるべからざる如きは、日本人の恥辱なり。吾等は其まゝ公益なるなり。私益などなきなり、日本に於ける公と外國に於ける公とは意味異なるなり。大宅なり。大宗家なり。日本人家族制、國家に於ては公とは國民の大宗家た

る 天皇まします。公に献げるは天皇に献げるなりもとより一切は天皇のものなるなり。献げるとは奉還するなり。わがもの一切なきなり、外國の公とは共同體の事なり、組合國家の事なり、民族集團の事なり、バラバラの單位の共榮的集團を稱して公と漠然と云ふなり、日本の比には非ざるなり。

又陸訓第一號を以て、戰陣訓の第七節死生觀には、

死生を貫くものは崇高なる献身奉公の精神なり。生死を超越して一意任務の完遂に邁進すべし。心身一體の力を盡し、従容として無窮の大義に生くるを悦とすべし。

尙東京府立高等家政學校長、清水福市氏は生命の教育昭和十六年二月號に於て、日本國家の向ふべき方向と國策遂行に對して、國民の全力を傾倒しなければならぬ時に當つて、極めて無力なる國民を惰性的に作り上げるに止まり、到底所期の目的を達する事は出來ないであらうそれと共に必要なるは教師たるものはよろしく人格向上をはかり、逞しき大乘的な愛の精神を體得しなければならぬ。教育とは地理を教へたり、理科を教へたり、修身公民を教へたりするのみがその全體の仕事ではあり得ない。單なる机上の空論ではなく、全生活を擧げて爲さざる

べからざるものである。教育は又單なる教授ではなく、魂と魂との接觸である。教育する前に先づ以て教育者自らが反省し精進しなければ、決して効果のあがるべきものではなく、その爲めには一身を挺して已まざる、國家愛を有せざるべからざる事は勿論である。一身の榮達や利慾に馳せる輩の何ぞ多きことか、學閥争驅の劇しきことか、現下の教育界は先づこれより打破しなければならぬ。

尙尾關貞一氏の研究によれば、鏡餅の古代信仰にも自我奉還の意味のうかゞはれて面白い。氏曰く、古代に於てはそれは民族の族長であり給ふ 天皇の御靈が、それに籠りそれに宿り給ふといふ、それは神の御神體として信仰され、それをことほぐといふ事は、それ自己の魂を捧げまつると云ふことも共に、又その分魂を戴くと云ふ意味を持つものであつた。それがやがて分化して、それは神への供物の意味に變つてきたのであつた。斯の如く自我奉還の思想は日本固有の精神であつて而かも日本精神の結晶なのである。

## 七、自我奉還とは

自我奉還とはどういふ事であらうか、單純に自分を捨てる事であつて、滅私奉公とか捨我奉公とかいふやうにも考へられるのであつて、國家多難の時に自分を忘れて、御國の爲めに盡す事なのであるといひ得るのであつて、別に取り立て論ずる必要もないのであるが、此頃奉還といふ事が、個人の所有を全部奉還するのである、といふやうに考へてゐる人もあるやうである。故に此點多少研究しておく必要もあると信するのである。然らば一體自我とはどういふ事であらうか。此頃自我功利の思想といふ事が世間に用ひられてゐるが、此の自我功利といふ事が、どういふ事なのであらうか、之れは個人主義・利己主義の事であつて、茲に百萬圓の財産を所有してゐる人があるとする、而かも其財産の造方が自分さへ儲ければよいといふ主義で造り出した。故に此の金は何に使用してもよい、自分の勝手に消費したらよいのだ。道德などは金とは関係のない事であるといふやうに、他人の迷惑は少しも構はないといふのが自我功利であつて、斯ういふ人は他人はどうでもよい、社會が何であらうと没交渉で、自分が享樂の生活にひたればよい。斯ういふやうに生活してゐるものが、所謂自我功利であつて、斯ういふ自我は小我だとか個我だとかいはれるのであつて、=セの我なのである。本當の人間味から出たもの

でない。故に斯ういふ自我は偽我であつて眞我ではない。而して斯ういふ自我には國家愛とか神に奉仕するとか、佛と共に生活するといふ事は少しもなく。只五官に觸れる物質的慾望に其日を生きてゐるのであつて、かゝる自我の強烈なるものが、時には神を愛するとか佛に仕へるとかいつた所で一つの偽善に止まるのである。之れを表示して見ると、

甲	自我	自我
	偽我	眞我
	舊我	新我
	個我	全我
	小我	大我

のやうに區別されて、甲は所謂悟らざる自我で、乙は悟つた自我である。悟らざる自我は我欲我慢我執といふやうな變質的性格を有し、乙は悟つた自我であつて、眞理即ち神佛と共に生くるのであつて、ナポレオンや蔣介石や豊臣秀吉の如きは甲に屬し、釋迦基督の如きは乙に屬す

るのである。斯の如く個人に偽我と眞我があるやうに、團體にも郷土にも國にも之れがあるのである。例へば或る政黨人が、其郷黨の事ばかり計つて他を顧みない、我國でも政黨が解消する迄はそれであつた。或る郷里に野心家が現はれると、自分の足下のみ利益を考へて大局に目をそゝがない。又或る團體があると其團體の事ばかり考へて他の事は考へない。時に全國的の會合に出て行くと其場所のうばひあひで、誠に見にくき場面を展開する事がある。又大會社などが學閥の爲めに滅亡した例もある。誠に恐るべき事である。新體制になつてあらゆる團體が合同整備されて行く事は其團體の自我奉還の現はれである。彼の國際問題で日本が國際會議から脱退したのは將にそれである、國際會議など偽善の實物である。某國の自利發展の手段であつて、日本もそれにまき込まれてゐたが、漸く悟つて偽善小我の仲間入りしてゐては日本の大我日本の眞我に生きる事が出来ない。大宇宙の眞理具現の見込みが立たない。そこで奉還といふよりも捨我したのである。世界は今や物の奪ひ合ひである。そんな仲間入りしてゐてはたまらない。故に今日本は世界中何れの國にも依存する必要はない。といつて輕蔑する要もない。只眞理に、惟神の大道を行けばよい。肇國の理念に燃え盛れば何物にも恐れるに足らない。茲

に十全なる國防の國家は建設されて行くのである。松岡外相が第七十六議會に於て、大國民たる米國民は須らくその世界平和に對して負ふ所の責任に目覺め、眞に神を畏れ敬虔の念を以て深く反省し、行懸りの如きは大悟してこれを一掃し、現代文明の危機を打開するためその力を用ひることを希望する。と予は亞米利加人にいふのである。彼の大地を有し、世界の大部分の金を有し、智慧を有してゐながら何が恐ろしくて軍備の擴張するのであるか。汝が眞に世界の平和を希望するならば、一日も早く軍備を撤廢すべきである。世界を大動亂に導いて永久に醜名を遺さんよりは、軍備を撤廢して世界平和の神として全人類の崇拜の的となる事は出来ないのか、若しそれ米人が之れを聞かば、日本の痴者と一笑に付するであらうが、予は日本の大馬鹿者なのだ、汝が軍備を撤廢する秋を以て、汝に世界平和を説く資格を認めるのだ、併しそれは最早不可能なのか、今からでもおそくはないが、どうしても反省出来ないのか、然らば我には只斷の一あるのみなのだ。而して茲に石原師團長の世界最終戦を味讀した事を述べて一億の同胞に自我奉還を以て、臣道實踐に一大喝を入れる事を宣言するのである。彼は軍艦の多き事を以て、飛行機の澤山な事を以て、要塞の完備せるを以て必勝すると思つてゐるが、餘りにも

物質萬能に捕はれてゐる、よろしく千思萬考すべきではないか、我國三千年の歴史は國難の時に、外患の重疊する時に大きく強くなつてゐるのである。吾々は國難に感謝し、外患に感謝し而かも最後の必勝を確信し、地上神國が、日本民族によつて建設されるといふ直感によつて邁進するのみである。

## 八、御 垂 示

我國體の眞髓は自我奉還に重大性のある事を考へさせられるのである。而して道は絶對に一つであつて、上御行し給へば皇道の御垂示になり、下行へば臣道の實踐である。拜記するも畏れ多き事なれども、

日本武尊御東征御難の御時お妃弟橘媛が、海神のたゞりなりとて御入水遊ばされ、日本女性の眞髓を御垂示遊ばされ。

### 天智天皇様が

秋の山のかりほのいほのとまをあらみ

わが衣手は露にぬれつゝ

二四

と如何に民草の上に御軫念遊ばさるゝかを拜察し得るものであつて、

### 龜山天皇様の

世の爲めに身をばをしまぬ心とも

あらぶる神はてらしみるらむ

増鏡に蒙古來襲の時、「大神宮へ御願に我御代にしもかゝるみだれ出きてまことに此の日本のまことなはるべくば御命をめすべきよし御てづからかゝらせ給ひける大宮院いとあさましき御事なりとなをいさめ聞えさせ給ふぞことはりにあはれなる」と即ち御身を以て國難に殉せんことを祈らせられた、其御心持を右の御製にあらはせられたものと拜せらるゝのである。(聖徳餘光 五一)

### 孝明天皇様は

明治維新直前に御在世あらせられて、吾々の御追想申上げるも恐懼の至りであるが、西田直二郎博士謹作の孝明天皇一二頁に

それゆゑに内治の上にも、上下の協和天下治平の御心が深く御坐したのであります。今や幕府の外交の事に端を發して、國內には眞々の論が出で、幕府倒壞の聲さへ聞え、國民に昏迷の狀のあります時、天皇は公武合體の議を用ひさせられ、御いとほしく思召さるゝ皇妹和宮親子内親王の將軍家茂の御臺所に御降嫁せられます事を御勅許になり、文久二年二月十一日に關東にて御婚儀の行はれましたことも、これ偏に國家の親和を籌らせられ、朝幕一致以て國威宣揚の大業に臨まれんとせられました、宏大な御心からと拜するのであります。和宮も天皇の御心をうけられて關東への御下向を、

惜まじな君と民とのためならば

身は武藏野の露と消えても

と詠まれましたことも、亦國家の御計なる御心を窺ひまつるので、國民のひとつく感涙に咽ぶところでもあります。

### 明治天皇様の

罪あらば我を咎めよ天津神

二五

民はわが身のうみし子なれば

二六

との御製を拜するに至りては、誰か感極まり海ゆかばをうたはざるものがありませうか。何人か自我奉還の喝に生れ變はり三百六十度の轉向をなし 天皇中心の生活に感謝せざるものがあるらうか。殊に此の世界大轉換期に當りて、萬民神明に誓つて大政翼賛に勇往邁進せざるものがあるらうか。

## 九、臣道實踐

眞理は一、一は神、神は絶対、そこに活躍の道あり。其道は一つ、之れが上に行はせられて皇道となり、下行つて臣道の實踐となるのである。

後醍醐天皇笠置に在し給ふて、楠公を御前に召され、

このたびはかならず幕府を亡ぼしたいと思ふが、どうしたならばよいか。

考へを残らず申し上げるやうにとの勅であつた。正成最敬禮して奏上。

朝廷にそむき皇室をないがしろにする逆賊はかならず亡びるにきまつてぞります。たゞし

いくさをいたしまするには、強くもなければなりません、同時に智謀もなければなりません。たゞ強いといふ點だけから申しますれば、武藏相模の兵は非常に強く、たとひ全國の兵を以てこれを攻めても容易に勝つことは出来ません。しかし智謀を以て争ひますことになりますれば、強い關東軍をうち破りますには容易でございます。たゞしいくさといふものは、時に負勝ちのあるものでございますから、一たん負けるやうな事がございませぬ、かつして御力落しなさいませぬように御願ひいたします。正成一人また生きてゐると御聞きになりましたならば、陛下の御運はかならず御開け申します。

と御言上申上げ七生報國の言葉を残して、自我奉還の妙境に入り、今世界大動亂の秋にも楠公の生命は躍動してゐるのである。

さて何れの時でも日本兵が應召された瞬間は、既に自我奉還であつて、無門關の日本の解釋の四十頁第五則、香巖上樹の公案説明中に、田中曹長の事實談あり。自我奉還の心境を知るに十分であると思ふ。著者谷口師曰く、

昭和十四年一月下旬の某夜八時半頃、私はいつになくAKのラジオのスイッチをひねつて

見たら、そこに語られてゐる話は、田中航空兵曹長の美談であつた。それは上官下方准尉の操縦せる飛行機は、不幸にしてそのエンジンの一つに敵弾を受けた。味方の陣地に歸還するには距離が遠い、豫備のエンジン一個のみの中では力が足りずに、ズン／＼機體が下降して行く、下方には敵軍が待ち設けてゐる。飛行機が落下したら、それを鹵獲して乗組員を捕虜にしようと待ちかまへてゐる、進退兩難である。下方准尉は捕虜になり機體を鹵獲せられるのは残念であるといふので、潔よく機體と共に自爆せんものと既に自爆の準備を行つてゐるのが田中機から見たのである。田中曹長はそれを見ると大聲で「自爆してはいけない、死するばかりが忠義でない、生きられる限り生き伸びて最後の一分間までも天皇陛下のために盡すのだ。低空飛行して續く限り味方の陣の方へ引返せ。」と呼ぶけれども、それは無論聞えないのである。田中曹長は仕方がないから空中に大きく字を書いてその旨を合圖する。下方准尉はその合圖に氣がついたものか、自爆を中止してエンジンが傷ついで、浮揚力の少い飛行機で、低空飛行を續けて味方の陣地へ引かへさうとするのだ。けれども機體は愈々浮揚力を失つて敵陣の中へ滑走状態で墜落した。田中曹長は上空から

見てゐると、下方機は道なき道へ滑走状態で墜落したと見る間に、地面の凹凸に衝突して顛覆して破壊した。下方准尉は機から這出て来て機密書類を焼却してゐると、敵兵が周圍から集つて来て、下方准尉を包圍攻撃する。附近部落民まで来て加勢する。下方准尉は拳銃を以てそれに防戦するのであつたが、敵は多勢味方は一人であり、拳銃の弾がつきたら萬事休すである。田中曹長はそれを上空から見つてゐるが加勢に自分が降りて行つて、下方准尉を自分の飛行機にのせて還つて其急場を救ひたいと思ふのだけでも、適當な着陸地点がないから、若し着陸せば下方機と同様に顛覆してもう再び空中へ舞ひ上る事が出来ない。そして此の陛下の飛行機が無駄になるのだ。又假令無事着陸しても下方准尉を救ひ還るには田中機は一人乗りだ。若し自分が救援に赴かなかつたならば下方准尉はあのまゝ敵の重圍に陥つて戦死して了ふ。それでは上官を見殺しにしたのであつて、自分の日本魂が満足しない。右するも死左するも死である。「香巖上樹」の架空的な机上の閑葛藤とは譯が違ふ、眞に之れ矛盾のないたゞ一筋の道に豁然として突き進んだ。かくの如き危急の世界に於てさへも、生長の家の悟から見るとときには進退兩難などといふものはないのであ

る。肉體本來無く矛盾も本來ない、着陸地點がないといふ事もない、着陸地點がないといふ事は只心の世界に空想に描いた閑葛藤に過ぎないのである。着陸の必要がある限り着陸地は到る所にあるのである。田中曹長は見事に截断して、敵兵の群る頭上へ滑走状態で着陸した。敵兵は逃げまどふ、(田中曹長は生長の家の誌友)滑走する田中機の下敷になつて戦死する敵兵は無数である。閑葛藤を見事に截断した田中機は、見事敵兵らが虚を衝かれて退くところを下方准尉を應援し既に疲労してふらく／＼になつてゐる下方准尉を、「上官殿、私の飛行機に乗つて下さい。」と負ふやうにして、その一人乗の田中機に乗込んで、エンジンにスタートを掛けた。もう進退兩難などは田中曹長の前にはないのである。二人を乗せた一人乗りの田中機は無事離陸して、味方の陣地へ歸還したのである。日本は今危急存亡の秋だといふ、自我奉還の一喝あり、何ぞ恐るゝに足らんやである。只恐るるものは此の眞理を悟らざる信念なきものゝある事である。

次に大義の著者、杉本五郎中佐は軍神といはれて誰知らぬ人もなからうが、軍神は昭和十二年九月十四日、山西省宛平縣東西加斗閣山に戦死されたが、其最期の容相は劍を片手について

兩足を少しくかゞめて東の方角に向つて立ち、最敬禮をしてゐられたといふ。何といふ神々しき姿であつたであらう、今英靈髣髴として我が前にあり合掌す。其陣中遺稿一四頁に、國を廢類に導くものは共產軍にあらず、人民線にあらず、乃至社會主義にも非らず、是等の主義は日本精神練磨の砥石なり。爲めに皇精神に愈々光を放つ。亡國は底なき自己保存、飽くなき利己心あるのみ。戦争は一身乃至世界の修養なり、利己心滅却にあり、自己保存の崩壊にあり、我執無きものにして始めて尊皇絶對、外に向つて御稜威を布傳し得るのみ。軍は功名心を去れ、自己保存の〇〇より脱却せよ、戦は先づ心に向つて開始せよ。一身の維新を計りて眞の日本軍人に蘇生せよ。かくして始めて軍は皇軍、將は神將、兵は神兵、戦は聖戦なり。

昭和十二年八月三十日

長城戦参加有感以誌

尙氏の愛兒に送られたる書翰の一節に、

天皇陛下に忠義をつくすんだぞ、忘れるな、毎日 天皇陛下をおがむことを忘れるなよ、お父ちゃんもお母ちゃんも正兄ちゃんも、二郎ちゃんも、正忠も三郎も皆 天皇陛下の子供だ。又總べて何もかも食ふ物も着る物も皆 天皇陛下から下されたものだ、食事をす



る前には必らず手を合せて、それからいたゞけよ、三郎ちゃんが、

天皇陛下をおがんでゐる時は、父ちゃんはいつでも三郎ちゃんと一所に居るんだぞ。

八 日

三郎君

私は茲に文人にして誠忠の龜鑑、菅公や和氣公をはじめかくれたる國士の事を讀者と共に考へたいのであるが、以上特殊の臣道實踐例に止め、茲に當り前の臣道實踐の一例を紹介して此の項を終はる事にする。其は、昭和十五年十二月十三日大朝により紹介された池田金一郎氏を村長とする村治の美談である。曰く、

北に鷲峯山起伏し、南は名峯笠置山系に挟まれて、一小盆地にわが中和東村は、村民一九となつて銃後のご奉公に邁進してゐる。出征遺家族の慰問に、勤勞奉仕に、産業報國に、銃後の務めに一層の徹底を期する爲め、村では従來の各種集會や會合を一切常會に改組し統合して新らしき心構の下に發足した。各部落では毎月男女別に例會が開かれ、學校の先生や、駐在所の巡查や、農會の組合からも出席し、鉦や太鼓を合圖に三々五々會場に集つて開會を待つ熱心さ

で、出席率は殆んど百%に近い成績を挙げ、上意下達は村のすみんゝまでも徹底し、自治行政はいとも円滑に進められてゐる。税金の滞納者の如きは殆んど皆無に近く、また國債應募は責任額を突破し、貯金も前年は割當額七萬圓に對して、十萬餘圓に達するといふ熱意を示してゐる。殊に最近に於ける婦人團體の活躍は目覺ましいものがあり、早朝の氏神參拜はもとよりの事、墓地の掃除や共同作業に奉仕し、兩回の防空演習には家庭防護組員として揃つてモンペイ姿で出勤し、その眞剣な雄々しい訓練振りには村民一同を驚かせた。蚊帳の釣環獻納運動に率先して參加したのもわが婦人會であつた。生活改善も村常會の規約によつて自肅的の勵行を誓ひ、面目を一新いたし、青年層にも新らしく青年常會を組織して修養の向上に乗出すなどすべてが新體制である。

## 一〇、結 び

以上述べた如く、自我奉還は日本人のみが理解の出来る事であつて、復日本人のみが實踐し得る所なのである。之れが日本民族の大使命達成の確立してゐる所以であつて、最近我國の宗

教育家や哲學者によつて稱導されてゐる。多にして一、一にして多なる一大真理にして、教育勅語に億兆心を一にしてとある。今新體制が一億一心といふが、五十年前に一兆一心と垂示されてゐるのである。君民一致、軍官民一致の唱へられるのも其歸する所は即ち一であつて多である。實に吾々は日本人として生れて來た事は大なる幸福である。宇宙を主宰し給ふ 天皇を奉戴する事は何といふ勿體ない、有りがたい、尊い事であらうか。

さて茲に承諾必謹自我奉還の讀方をのべますれば、

詔を承つては必らず謹め、而して自我は還へし奉る。

音讀すれば、

シヤウシヤウ ヒツキン ジガ ハウカン

と讀み、之れを表示いたしますと、

承諾必謹、

自我奉還、

天の呼聲、

地の應答、

上意下達、

下意上達、

火、

水、

天、

地、

君、

民、

大宇宙、

小宇宙、

眞理、

神、

以上のやうに考へられるのであつて、之れは絶對的心理であつて、神の攝理である。故に政府の要人が自我奉還の妙境に今を生かし、翼賛會の幹部が此の眞諦を悟られ實踐さるゝならば内治まり、外に恐るものはなくなるのではないでせうか、淺學鈍才なるも憂國の一端を表現せん爲めに此の編纂をなし以て二千六百年記念の小品といたしました。

一一、提

唱

今茲に本稿を終はるに當りて、二、三の希望を提唱しておきます。

## 一、日本人の短所二つ

一は識者の既に氣づかれてゐる所であつて、日本人は熱し易く冷え易い缺點を持つてゐます。之れは又長所でもあるかも知れないが、花は櫻木人は武士といふ。之れは自我奉還をうたつたものといひ得るが、花は梅人は文士と併用したい。文武は鳥の兩翼である。億兆一心といひ一億一心といふは之れの事である。でなければ戦線の犠牲になられた十萬の英靈に對してどうして申譯があらうか。我々は職域こそ異にしてゐるが、世界人類を本當に平和に導くには萬邦をして其所を得せしむる聖旨貫徹まで闘はねばならぬ。連戦連勝だからとて油断はならぬ。勝つて兜の緒をしめねばならぬ。又一回や二回不利に陥つたとて失望するには當らない。今や世界の思想界は大動亂を來し、神を無視して弱者を餌食となし、甘き汁に飽かんとしてゐる。正が勝つか邪が勝つか、善が伸るか悪が縮むか、今や地上は物質と精神の戦ひである。熱しやすく冷えやすき性格は物質觀に捕はれやすい。今こそ日本人の反省三思すべき時で、皇國の理念に燃え神一元に生くべき秋ではないだらうか。

二は公德心の缺乏である。公德心の缺乏は一面利己心の暗躍である。大政翼賛會は斯ういふ

點に大いに力を盡して貰ひたい。此の事實は幾らでも擧げられる。

## 二、國民教育の完成

多年審議を重ねられたる國民學校案は實現さるゝに至り、大慶至極に存するのであるが、國民學校は制度の改革、組織の整備であつて、之れを活かすには教育當事者と、教育者其人によつて遂行されるのであるから、教員の優遇は十二分に考へて貰はねばならぬが、尙必要なは教育關係者の精算と三百六十度の轉向を切望したのである。

## 三、社會事業の目標

我國社會事業の目標を鮮明にして貰ひたい。我日本民族の優良化を計つて貰ひたい。我日本民族の優秀性は自惚ではなく誰もの自信であるが、其方法を誤れば千載に悔みを遺すであらう斷種法とか結核多數の宣傳に、餘り力瘤を入れるは考へ物であつて、もつと積極的にして厚生省の大部分の仕事は之れてあつて欲しい。

## 四、宗教の統一

宗教の統一問題は至難である。故に我國の如き超宗教の國に於ては國教の制定が必要ではな



勢伊元後丹 殿 本 社 宮 内

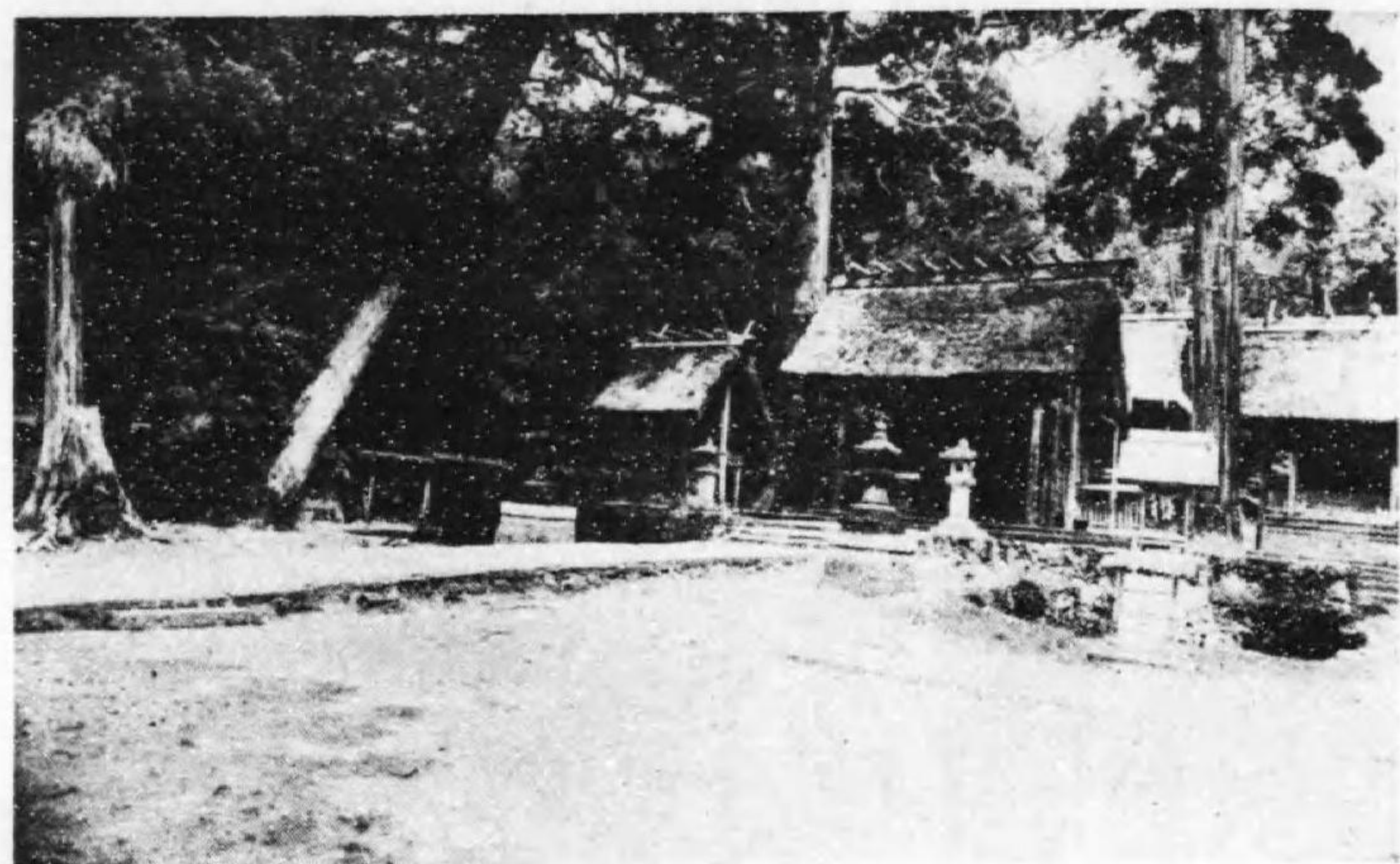


石座御戸岩ノ天  
(勢伊元後丹)



川鈴十五及社戸岩ノ天  
(勢伊元後丹)

いでせうか。今回神祇院の復活を見たのであるから、百尺竿頭一步を進めて國教制定の審議に着手されん事を切望してやまないであります。(昭和十六、二、二六、稿)



勢伊元後丹 殿 本 社 宮 内



石座御戸岩ノ天  
(勢伊元後丹)



川鈴十五及社戸岩ノ天  
(勢伊元後丹)

いでせうか。今回神祇院の復活を見たのであるから、百尺竿頭一步を進めて國教制定の審議に着手されん事を切望してやまないのであります。(昭和十六、二、二六、稿)

## 第二篇

### 一、丹後元伊勢

環境は人を造り人は環境を變化するといひますが、此の寫眞による莊嚴極まる神域は私の誕生地であります。十五、六歳までは正直一筋の父、慈愛其のものゝやうな母の膝下で育てられました。青年時代は小學校教員で、多く寺院が宿所でありました。壯年期は熱心な基督教信者でありましたが、今は基督教になりきれず、古郷の元伊勢の神域が衷心より有りがたくなりました。私に斯うした生活を續けて來てゐるのも、全く神縁の然らしむる所です。左に社殿の祭神御鎮座の由來を拜記しておきます。

祭神

天照大御神

配祀 天手力男命  
栲幡千千姫命

### 御鎮座の由来

當社は人皇第十代崇神天皇三十九年三月皇女豐鋤入姫命に天照大御神より別に大宮地を覓めて鎮め祭れと御神勅があつたので其年八月十八日の吉日良辰を選び大御神の御靈鏡を戴き奉りて但波國に至り、現今の社地に行宮を建て吉佐宮と尊稱し四年の間齋き奉られたのが創始で其後第三十一代用明天皇の御世に至り、第三の皇子膳子皇子が丹波國天田郡三上ヶ嶽の凶賊征討の時に親しく賊徒平定の祈願を籠められ、御神威によりて大勝を得たる奉賽の爲め新たに莊嚴なる神殿を造營せられたのであります。始め御神勅により豊鋤入姫命が此の地に大御神を祀られたのは神宮を建てられた始めであるから、中古よりは元大神宮と稱し又は元伊勢と唱へたのであります。

### 二、聖 範

海軍中將出光萬兵衛氏が、宗教維新昭和十六年紀元節特別號に、今上陛下の御日常を仰ぎ奉りてといふ、御謹話の内より一、二節を拜借して、如何に、陛下が御聖徳高きかをあふぎ奉りたいと思ひます。

- 一、滿洲事變勃發して間もなく、其年の十二月二十八日になりますと、お側の侍従に國家は今非常時である、遠慮いらぬから何時でも参内するやうに、各司司に傳へよ。
- 二、聖上陛下におかせられては、各省から書類を奉呈して御裁可を仰ぎ奉る時、之に對して我々の言葉で申すと、御認をお捺し遊ばす様な場合、御裁可の事柄が如何に簡單なことであつても、之を臣下に御委ね遊ばすが如き事は絶対にあらせられない。
- 三、聖上陛下御自身泥田の中に御入り遊ばし農家の者と同様に御手づから苗をおさし遊ばし農家の勞苦を偲ばせ給ふのであります。私も奉仕中四回御田植をのお伴の列に加はりまして、目の邊に苗をおさし遊ばす御様子を仰ぎ奉つた時には、そゞろ感激の涙に袖をぬらしたのであります。
- 四、相州葉山にて晴天の時に小舟にて、海上にお出ましになる時、御道筋に網を曳き或は釣

をして居るのを、天覽遊ばす時は、何時でも舟の進路を曲げて通れと仰せ出させ給ふのであります。

五、一とせ三浦半島の先の初聲村といふ處に御自動車で行幸遊ばした時、私は漁船二隻を率ゐて御用を務めて歸つたのですが、御前に罷り出ますと、聖上陛下には今日は皆無事であつたか、歸りは南の風が相當に吹いて居たが、あの中に乗つてゐた給仕や、小使は船量はなかつたか又怪我はなかつたか。

六、一夏某所にて植物の標本を、天覽に供したのであるが、珍らしい標本を見て愉快だと仰せ給ひ、二つはないかと御下問あらせられたが、若し一つを献上するやうな事があつては、技手が困るだらうと仰せ給ふて、二つの有無の御下問を御取止めになつた。と『臣脇田良吉七、御聖徳の數々を拜記するならば、如何なる大冊にも記し得ないであらう、それは御日常の御生活のすべてが御聖徳であつて、臣民の聖範であるからである。故に今一つ谷口雅春師編著の 天皇絶對論とその影響中(三四一頁)昭和六年秋熊本を中心とする大演習の際に時の宮内大臣官房總務課長木下氏の謹話を、矢野西雄氏の筆になれる一節を拜記して此り

項を終はる事にする。』

十一月十九日の午後四時御召艦榛名は日没を前にして抜錨しました。次第に夕闇が迫つて参ります。甲板には小さい電燈が一つ灯つてゐるばかり、明るい室から出た刹那にはあたりには何かがあるやら物のあやめも解かりかねる様子でありました。目が闇になれて來たのでせう、木下課長は自分の間近に、陛下の御後姿を拜せられ恐懼してその當時の心境を物語られてゐます。

『甲板には誰も未だ出て居らぬとばかり思ひ込んで馳せ上つた私は、思ひがけなくも間近な夕闇の中に、只御一人陛下の御後姿を拜したのであります。右舷の手摺近くに海の方をお向きになつて直立遊ばされ、今し方望遠鏡から御手を離されたかに拜し、畏くも御右手を舉げさせられ、何者にか御舉手の御會釋の御姿勢であらせられます。』

更に語をつゞけて次の如く語つてゐられます。

『陛下の御覽遊ばされてゐる方向を遙かに凝視致しましたが、夜闇の他何も見えません。すぐ私は側に据ゑつけてある望遠鏡に眼をあてました。時刻より推し測つて艦は未だ灣内



を南下してゐる筈です。灣の中央線を航行してゐますから、左舷大隅右舷薩摩の海岸にも六湮位離れてゐる筈です。艦は今指宿の邊を航海してゐるのでせう、その海岸線一帯に赤い灯の流れが連綿と果しなく続くのが見えるやうになりました。高い所に何丁おきかに黙々と大きな火のかたまりが、ぼつと煙を上げてゐるのが見えて來ました。即ち提灯を打ち振り山々には篝火を焚きながら奉送申上げてゐる、誠忠純朴の人々であります。その純情その赤誠を愛で給ひてこそ、たゞ御一人閣中に御直立あそばされて、ねんごろなる御會釋を賜はつてゐるのであります。六湮の海を通してこの有りがたき御神容を海岸の村人は知るよしもありません。見えざるものに答へ給ふ大御心の宏大無邊なるを拜し感泣せざるものば一人もありませうか、木下總務課長はみちあふれる感激でじつとしてゐる事が出來ず急ぎ榛名艦長に相談に行かれまして、軍艦全部の探照燈に點火し、大隅薩摩の海岸の人々に答へられたといふ事であります。

以上は木下課長の眼底深く魂深く刻印づけられた聖なる一瞬の出來事ではありますが、之れは一億臣民の感激であります。陛下は現人神にましますば、全き愛、全き智慧をもち

給ふ、その深き廣き人智を以て測る事は出來ません。億兆萬民に所を得させ給ふ大愛を思へば正に聖恩無窮であります。』

天皇は神にしませば唐舟も

白木綿かけてまつろひにけり

黒田清綱

### 三、政 變

昭和十六年十月十八日、近衛さんが辭職され、東條さんが、内閣總理大臣になられたが、信任を辱ふすからには最後の御奉公であるといはれて起られた公爵、おそらく時局の或る段階までは御變動のないものと國民は信賴してゐた。併し私は十月六日東上して、某省を訪問したが、外には強敵をひかへ内には暗雲たゞよひ、何時何事が起るか判らない雰圍氣で全身引きしまられる思ひがあつたが、突然政變を見た。一億民は驚かぬものはなかつた。殊に近衛公は二十八歳京大卒業論文に、英米本位の平和主義を排するといふ、警世の著を公にせられた人で、

其時は第一次歐洲戦も熄んで、世界は國際聯盟の聲に酔ひ、我國にも英米製の民主主義、平和人道主義は滔々として流れこみ、日本の進路を忘れて只英米に隨喜の涙を流してゐるものが多かつた。其時此の著ある氏の確信は堅く、時代に超越して常に經世家の信用厚く先頭で立つてゐられたが、時局の重大なるにつれ三度まで總理の椅子につかれた。其公爵を彼は批評するものもないではなかつたが、主義合はぬといつて桂冠された事は、公の自我奉還の心境を一層鮮明にしられたのであつて、賢明なる退陣であつた。事は今更誰も首肯する所で、之れこそ天佑であつて、東條大將は御下命拜受直ちに組閣適材を適所に奏上されたが、反共情報十二月號に、豆腐と東條宰相の一課題があり、其數行に「科學萬能主義の彼等は魂なき日本人を作らうとするのか、それでは悦服出来ないのが日本人の特長だ、日本人は魂を以て連がる、かくの如きは親の心子知らずと云ふもので、一日も早く東條首相のあの熱意を理解すべきであると。道行く老嫗に遇つては御苦勞だナ、學童を見てはよい日本人になつて呉れよと、又川崎工場に出かけて、ハンマーの一撃もこれ悉く皇軍の戦力となつて直接大戦に参加するものである事を銘記せよと。何といふ名宰相であらう。一億一心を把握する首相の心境こそ、近衛公の蔭かれ

た種を培養されるに申分はない。近衛さんの辭職に天意あり、東條さんの組閣にも神慮はある。吾々は政府のなさる事に一點の疑義なく、職域の奉公に邁進する覺悟をもたねばならぬ。

#### 四、翼賛會の活躍

昭和十六年十一月二十五日午後一時から日比谷公會堂において開催された、翼賛會主催難局突破大講演會に於いて、東條總裁は烈々の叫びをされた。其要綱は

まことに現下の事態は光輝ある二千六百年の歴史の上において、かつて見ない重大なる時であり、其の難局を突破する事こそ、今日吾等國民に課せられたる光榮ある責務である。そのためには一日も速かに國民の總力を結集し、高度の國防國家態勢を完成し、一億一心鐵石の團結を以て時艱を克服すべき強靱なる體制を確立することが最も緊要である。その爲めには大政翼賛會は暫らく民情を諒察これを吸収して政府に上通すると共に、政府の企圖する所は明瞭かつ迅速に國民に傳達しかくして官民一致協力、燃え立つ翼賛の精神をもつて勇往邁進しなければならぬ。政府はまた大政翼賛會を育成強化し強力なる支持を惜しまざる事はしばしば私が申

述べた通りである。われら國民としてとるべき道は只一つ各人が各々の職分において慕に臣道を實踐し奉公の誠を致すこと以外にはないのである。すなはち、われ／＼のこの毎日々々がすでに戦ひであり、われ／＼は銃を取らぬ戦士である。個人の小さな利害習慣に執着して大なる國家目的を忘れる事は斷じて許されない。しかして内外諸般の情勢にかんがみ今後日常において一段の緊縮をみることは止むを得ない事であつて、物資其他についても恐らく同様と考へられる。われ／＼は何としてもこれを堪へ忍んで行くだけの覺悟を十分もつてゐなければならぬ。また一方その間にあつてあるひは闇取引、あるひは買溜め、情實賣買などによつて配給組織を紊し當然あるべきものが姿を見せないといふやうな現象は斷乎として絶滅しなければならぬ。全國民はひとしく戦友である。己れ獨りの安逸を望み、つくすべき仕事に骨を惜んで、ためにも起つて戦ふべき戦友を苦しみに陥れて顧みないといふが如き、これらの行動は絶對に許すべからざるところであり、いかなる困難いかなる犠牲も全國民がひとしくこれを負擔する。この事があつてこそ初めて一億一心鐵石の團結は成るのである。

今日の時局は徒らに遲疑逡巡徒らに不平を洩らしてゐる場合ではない、政府の方針施策につ

いてもし足らざる所があれば、その是非を論するよりはまづわれら國民の實踐をもつてこれを補ひ、相ともに助け合ひ勵まし合ふことが何よりも必要であると信ずる。今こそ官も民も渾然一體となり如何なる場合にも全國民が一つになり、ともに戦ふ戦友意識を以てお互を信頼し政府を信頼し速かに國防國家體制を完成しもつて此の事態の推移に即應すべき態勢を整へなければならぬ。すでにたゞ今この瞬間においては皇軍將兵は陸に、海に、空に砲煙彈雨を冒し寒氣に抗しつゝあらゆる困苦缺乏に耐へて聖業完遂のため戦つてゐるのである。不肖私も國民諸君の陣頭に立つて力の及ぶかぎり全力を盡して事に當る決心である。願くはこの重大なる秋、より一層潑刺たる精神をもつて大政を翼賛し奉り、臣道を實踐し以て一億一心火の魂となつてこの難局を突破するの決意を昂揚して頂きたい。全國民が鐵石の如き團結と火の如き戦友意識を以て堂々と邁進する所必ずや洋々たる前途が日本の前に開け來ることを確信してやまない。

以上大講演に一層自我を奉還すべきを痛切に感ぜられるが、又反共情報昭和十六年十二月號大政翼賛會副總裁安藤氏の招待懇談會に於ける談話の一節を借りて翼賛會進展の一端を知る事にする。安藤氏

私は招電に接して外地から戻つて来たのであるが、外地から内地を顧みる時、内地の思想が混沌たることが憂慮に堪へなかつた。幸ひ熊谷總務局長の骨折りで大政翼賛會内部の汚濁は一掃されて謂はゞ私は掃き清めたる座敷に客に据ゑられたやうなもので、此の點尤も欣快とする所である。と各名士の懇談ありて後又氏は曰く、

私は只今大政翼賛會副總裁の席を汚して居りますが、實は未だ眞實に引受ける決心がつき兼ねて居ります。大政は 天皇の統治し給ふところであつて、大政翼賛の意義は何處にあるか、關係諸機關の意義究明から残された領域が大政翼賛會の進むべき途であると信ずる。この眼目が明かになれば私は國民總進軍の先頭に起つて粉骨砕心する覺悟です。然しながら大政翼賛會の性格を明瞭にすることは短時日では出来ない。此點時日を藉して頂きたい。と編者は茲に翼賛會の翼賛會にならない事を附記しておきます。而して翼賛會は煉瓦作りのセメントの役目であつて欲しい。

## 五、一億臣民の心境と自我奉還

明治維新が大政奉還によつて實現したやうに、昭和の新體制は一億臣民の自我奉還の心境によつて實現するのである。一億臣民外の汪氏は、近衛閣下によつて叫ばれた東亞新秩序は私が二十一歳の時、日本を愛し中國を愛し東亞を愛した氣持の敷衍ともいへます。それでこそ私は重慶をとびだしたのだ。そして其時以來私の持ちつゞけてゐる決心はたゞ一つ死あるのみです。いまわれ／＼は順風に帆をあげてゐる。しかしたとひこれがどんな逆の暴風にならうとも私はひたすらに、ひとすぢの航路を進みます。たとひ沈没してもよいのだ、私は共存共榮をもう一步進めて共存共滅を叫ぶ。私は今尙兩國民の戦ふのを見て生きる心地がしないのです。一日も全面和平の實現の早からん事を願ひ、そのために一身を碎かんことを誓ふものである。

之れは昭和十六年六月二十五日、某所で汪氏招待席での大演説の一節である。

### 一、久原氏参議辭任の聲明一節に

顧みるに自分らが内閣参議に推薦せられたのも主として舊政黨の因縁によるものであります。すが、かゝる派閥的因縁はこの際すべて速かに解消しもつて政界の天地を清新にし眞の舉國一致體制の完遂に邁進すべきであると思ひます。故に私としてはちやうど本日が解黨一

周年にもなりますので辭表を提出したのであります。今後は古い派閥的な觀念を洗ひ去つて全國民を同志とし廣く各方面の士と計り渾身の御奉公を致したいと思ひます。

二、昭和十六年八月十日、大朝社説の一節に議會人の眞面目を求むるとて、曰く國務運用のために、最適任を求めるといふ以外に大臣銓衡の標準は絶対に存在しないのである。さうした人物であるならば、民間でも官界でもはたまた議會關係でも至極結構である。しかるに椅子の二つ餘つてゐるのに目をつけて、我田に水を引くかの如き潜在意識の働くのは、はたしてどんなものであらうか、かうした考方は自分本位の考へ方に發足するもので、それがまだ清算されずにゐるのを、寧ろ不思議にさへ感ずる。恐らく其論據の中には、國民公選の議會人を尊重せよとの意味が含まれてゐるのかと思ふが、その正解に基づくかどうかは疑問である。それは明らかに翼賛精神を骨子とすべきものであり、斷じて地位官職利益の分配に傾いて舊き政黨政治時代の殘滓をとめてはならないのである。

と論じられ、中央協力會議各委員會で、高野、吉田兩氏の質問奉還運動について、池田弘氏の答に、

觀念的な意味においてのみいはれる私有財産制の否定は斷じて排撃すべきである。唯我々愛國運動に携はるものは日本人である限り一切のものを、

天皇よりお預かりしてゐるものであるといふ意識を明確ならしむるため奉還運動等の言葉を使用することがあるが、しかしこの意味は左翼のいふ私有財産否定の意味とは内容的に全く違ふ。

如斯奉還の意味が誤解されやすいのであるが、自我奉還は私有財産などいふ物質的のものでない事は何人も諒解されると思ふが念のために名士の所説を附記したのである。尙現時自我奉還の心境が如何に高調して來たか、大東亞戦争目的貫徹に關する決議案に對する理由説明の結論を山崎達之輔氏代表によつて公表されたものを轉載すれば左の如くである。

政府が先にアメリカの交渉に隱忍自重を重ねられつゝも毅然として、大節を持しよく萬一に處するの對策を誤らず機宜を制せられたる御苦心に對しては國民は深甚の敬意を表するところである。皇國に盡す誠を傾けて政府を支持するのである。私を一擲して國家に殉ぜんとする全國民の赤誠に對してはもとより政府も無限の信頼を拂はれることゝ信ずる。か

くのごとくにして軍官民一體學國鐵火の一丸となつて躍進すること實に方今の要務である。

承詔必謹自我奉還

さて大朝に難關を突破するといふ貴重な記事が連載された。自我奉還の士でなければ出来ない業である。一々詳記を許して貰ひたいと思ふも小冊子の及ばぬ所、芳名と事業を列記して國の恩人として敬意を表する事にする。

一、大海軍論の先覺

語る人 頭山 滿翁

第一期議會福岡第二區選出の香月忍經氏

二、夜の戦場に君が代

櫻井忠温氏

血達磨の突撃遂に成功

三、一對十三で玉碎

芳澤謙吉氏

成敗利鈍を天に任す

四、神に通じた信念

加藤完治氏

滿洲移民初期の秘話

五、戦友の屍を越えて

井上 幾太郎大將

空軍建設の窮地打開

六、勝利の鍵”人の和”

釘宮 馨氏

役立つ丹那の經驗

七、敵襲中の團結力

田中勘次氏

上海開戦當時の在留邦人

八、死の決意が拓く道

石原廣一郎氏

自力本願こそ勝利の鍵

九、水牛の死肉を喰ふ

松浦 淳六郎中將

飢餓を超えたあの猛反撃

一〇、ブリキの日章旗

白瀬 中尉

氷壁をよちて南極へ

五六

一一、四十餘の兵器特許を得るまで

萱場四郎氏

行き詰りの必要

一二、條約改正の裏面

金子堅太郎伯

壽府英京を駈け廻る

一三、六割で十割に勝つ

高橋三吉大將

條約上の劣勢を實で償ふ

一四、先づみな落着け

松岡國松翁

天災で養はれた度胸

一五、張作霖と一戦

駒井徳三氏

物を言つた苦心の地圖

一六、捨身の前に堅陣なし

平櫛少佐

尊きこの精神外國では悉く失敗

一七、先づ我執を捨てよ

多田駿大將

輝く歸還談

以上 一六、一七、別項

さて私達は今日の日本民族として生れて來た事は大なる幸福である事を歡喜すると共に、列記せる恩人に對して、衷心より深謝し合掌する事を忘れてはならない。

以上は自我奉還の尊い體驗を記述したのであるが、今、日本人が日本人の面目に立歸つた時眞の日本人にならう。三百六十度の轉回をして 天照大御神の神徳に抱かれようとしてゐる形式的の努力が禊である。翼賛會では盛に行はれてゐる結構である。只願くは形に止まらず精神的轉向が願はしい。佛教でいはず即身成佛の妙味を悟る事であらう。

官幣中社吉田神社神拜詞集より六根清淨太祓詞を轉載しておきます。

### 六根清淨太祓詞

天照皇大神の宣く人は則ち天下のみたまものなりすべからくしづめしづまることを掌る心

は則ち神とかみとの本のあるじたりあがたまひしを傷ましむることなかれ是の故に目に諸のけがれを見て心に諸のけがれを見ず耳に諸のけがれを聞きて心に諸のけがれを聞かず鼻に諸のけがれを嗅ぎて心に諸のけがれを嗅がず口に諸のけがれを言ひて心に諸のけがれを言はず身に諸のけがれを觸れて心に諸のけがれを觸れず意に諸のけがれを思ひて心に諸のけがれを想はずあがたまひしは六根ちつごんきよく淨きよらかなり六根ちつごんきよく淨きよかなるが故に五臟の神安らかなり五臟の神安らかなるが故に天地の神と同じもとなり天地の神と同じもとなるが故に萬物よろづもののみたまと同じすがたなり萬物のみたまと同じすがたなるが故になすところの願として成らすといふことなし無上靈寶神道加持

## 六、祈りの生活

支那事變勃發以來は、從來の祈禱生活は一層深刻になつた。大正四年八月十三日、豫言講話日本の未來觀を公表して以來、自分の文獻に疑問が生じ常職の見學を兼ねて北米合衆國を横斷ニューヨークのサブウエーを快走しつゝ、罪の都は亡ぶべしなどいふやうな印象まで與へられた

が、それでも日米親善を計る事は無名の旅行者にも無意味ではなかつたので面白い事もやつて見たが全く過去の一夢であつた。併し日本の未來觀は確信が深くなるばかりであつた。それならこそ事變勃發以來、出て入つても必勝祈願の心構であつた。昭和十三年七月七日聖戰一周年記念として、聖戰必勝是天則の大旗を造り、方々に寄贈し、伊勢神宮、三原山、日光、叡山、橿原神宮、笠置山、鞍馬山、元伊勢、高野山と到る所に靜所を求めては祈つたもので、左の如き誓詞も出來たのである。

### 自我奉還の誓詞

謹み畏みて大宇宙の創造主

天之御中主神、全人類を主宰し給ふ 天照大御神に自我奉還の誓詞を献納いたします。

皇國の臣民として地上に生を稟け聖恩により今日の地位名譽財産を與へられましたか、



單に自分の智慧自己の徳によりてのみ獲得したるものと誤信し他を顧みるの雅量に乏しく殊に

明治天皇様の教育勅語を拜誦いたします時臣民としての本分を盡し得なかつた事は從來の生活が餘りに自己中心であつた事に氣づきまして衷心より御詫びいたし、今日の地位名譽財産等は固より全身全靈悉く聖旨顯現の爲めに御預かりせしものと深く銘肝感謝いたしまして自己の職域に奉仕し八紘一字の大理念に邁進し以て、天壤無窮の皇運を扶翼し奉らん事を宣誓いたします。

恐懼再拜

昭和十六年六月一日

## 七、神の法廷太平洋

東はコルデイレラ山系の迫つてゐるアメリカ大陸の西岸を境とし、北はベーリング海を圍む國、東は花模様のやうに横つてゐる列島とアジアの東南部より濠洲地中海を含む、南は稍々不明なるも濠洲の北邊を境とする廣袤實に一億六千八百平方キロの三角形の巨大なる地域を、今

神は大法廷として世界の平和を眞實に念願してゐるものは、どの國であるかを審判されてゐるのである。それが大東亞聖戰なのである。人は各々其職域により考ふる所見る所を異にする爲めに、其表面だけを見て、英國は紳士國だ、亞米利加は明朗其のものであるなどと思つてゐたものもあつたのであるが、彼等の外交が何處に正義の片鱗を見出し得るでせうか、昭和十六年十二月八日宣戰の大詔は發せられた。神の御聲である。承諾必謹自我奉還、我等一億民は起ち上つた。空に、陸に、海に、神格化した我將兵、暴風も、炎熱も、怒濤も、豺狼も、豹虎毒蛇も恐るゝものは一つもない。況んや遊戯半分のやうな敵性國家の將兵……嶋田海相講演の一節に曰く種々報告に接する毎に、ことに當つて天佑神助は實に灼然なりし事に感激いたしてゐる次第である。これを布哇海戦について見てもわが艦隊は連日吹きすさぶ季節風の中を進撃したのであるが、燃料の補給には差支がない、しかもわが行動をかくするには好都合であつた。攻撃の當日は天候が適良となり、豫定の奇襲を決行する事が出来。また襲撃の翌日頃から再び猛烈な暴風となつたのである。しかし神助は至誠奮勵一意本分を盡すものに與へらるゝのであつて神助こそは海軍將兵多年の忠誠努力の神慮に叶ひ奉つたのと感銘いたすものである。と、

神は世界を圓形に造り、人類の生活を幸福ならしめ地上を樂園たらしめようとの思召あるにも拘はらず、敵性國家は神の聖旨に反し、弱肉強食飽くなき横暴を極めて來た。其報いこそ今現はれて來たのである。彼等此の際軍備を徹廢し神に懺悔し、世界の神選國家に謝罪すべきである。敵性國家群よ一瞬の飛行機一艇の小銃を持つ間は徹底的に聖戰の鋒を納められないであらう。

## 八、世界の新秩序建設

大詔は煥發されて二ヶ月、世界の情勢は一大轉換である。世界は物質で支配され、金權で左右され、弱は強の肉となつてあきらめの人生觀で生活してゐたが、今や世界人類の生活状態は一變した。神への叛逆者は地上から姿を消す時は來るだらう。大詔に起ち上つた一億民はそこまで戰ふのである。百年か二百年か、はた永遠か、二十億の人類其所を得る迄、戰ふのが日本人に課せられたる宿命である。有史以來三千年の正史は聖戰の歴史である。決して神國だからとて順風に帆を上げて來たのではない。過去三千年の歴史は今日の聖戰を完遂して人類永遠の

平和を計る爲めの準備であり試煉であつたのである。我々が今此の時代に生れて來たのは、之等の一大責任を果すために來たのである。第一線に立つ將兵諸賢と共に、重責を負はねばならぬのである。今は世界新秩序の荒木建てのやうなものである。而して此の世界新秩序建設には分擔工事がある、それが大東亞共榮圈である。歐洲に於けるそれは獨伊の分擔である。此の中にゐて小さい我々にも職域がある。此の立場に於いて私共の積極的分野は教育、社會事業、宗教の三大基礎について、國家悠久の事を考へて見たい。此の秋不肖私は白川學園を見守りつゝ、毎日、大朝・大毎・日出の三大新聞を閲讀し涙と感謝と合掌してゐる事を特記して、以下結論として卑見を述べ讀者諸賢の御批正を願ひたいのであります。

さて聖戰の必勝は是れ天則であつて、世界新秩序建設の大設計は既定のものであるにしても愈々健固なる基礎工事をなすは容易の事でない。石原廣一郎氏が南方物資の製品化も千年二千年と腰をすゑてかゝらねばならぬといはれたやうに、私が茲に述べたいのは教育や社會事業や宗教の事であるが、教育や社會事業の事は他日に譲り宗教についてある。それは複雑微妙なる思想問題は實に油斷が出来ない。歐米の基督教侵入が何かの便乗策であつたり、進歩したと

いふ醫學が却つて體位向上に逆効果を奏するやうな事があつたりするらしいから、此際何事でも日本本來の面目に立ち返つて、悔ひを千載に残すやうな事があつてはならない。此の空前絶後の好機會に國教の制定を研究して貰ひたい事である。殊に神祇院の復活は國教制定の前驅である筈である。大東亞聖戰の戦果は、必然此の問題の實現を促してゐるのである。日本信仰といふ雜誌昭和十六年十一月號に、松田道別氏は

古來日本は神國なりと云はれてゐる、即ち 天皇を神として仰ぐ國である。神なる 天皇に一切を捧げ奉ることにて於てのみ眞に日本人と云ひ得られる。日本の輝ける歴史の相は、天皇信仰であつた。過去・現在・未來に亘つて無窮に發展する根本原理は 天皇信仰の中にある。なぜなら 天皇の大御稜威なくしては遂に日本人として生き得られぬからである。大東亞共榮圖の確立も、世界新秩序の建設も、すべて大御稜威によつて成し遂げられるところである。さればこそ 天皇を中心に擁し奉りつゝ、全生命を奉還することを日本民族の使命なりと感じ、そこに我々は絶對なる信仰を捧げるのである。

即ち 天皇陛下は、天照大御神の御顯現であらせらるゝことを眞に心の奥底から思念し奉り 天皇陛下萬歲、天皇陛下彌榮を奉唱するとき、日本人の魂の歡喜こそ實に宗教以上の宗教極致を實證するものである。我々はかゝる國體信仰に徹するならば、これ以上の如何なる個人魂の救済をも必要としないのである。これこそ正しく純乎として純なる日本宗教と云はねばならぬ。と

昭和十七年一月十七日、大朝には十六日神祇院、皇典講究所、大日本神祇會主催、陸海軍省其他協賛の大東亞戦争の完遂祈願祭、並に講演會は日比谷公會堂で開かれ其席上東條首相は、大東亞戦争の劈頭において皇軍は絶大なる戦果をあげさらに捷報相ついで來り、各方面に神速果敢なる戦局を進展せしめつゝあるのである。その戦況報告に接する度に、皇軍の進むところ常に天佑神助のあり給ふことを如實に感ずる次第であつて、衷心洵に感激と報謝の意に堪へざる所である。また一億國民の敬神報恩の念は殊に開戦以來津々浦々にいたるまでいよゝゝ敬虔に高揚せられつゝある。この大戦を完遂するため、前途の長きものあるべきはわれわれが最初から十二分に覺悟してをるところである。しかも天佑神助は萬民の至誠を盡してはじめて現はるゝといはれてをる。わが忠烈無比なる皇軍將兵の殉國の精神

と一億民の盡忠至誠の發する所、この大戦が神明の御加護によつて必らず赫々たる勝利獲得とともに完遂せらるゝことを私は深く確信してをるのである。と

確信を吐露され、嶋田海相が前項に記載の通り講述されてゐるやうに、我々日本人は事實に於いて神學者が論ずる如きものでない信仰を以てゐるので、此の事實を組織化すれば、信條も出來教典も出來、又生活する事も出來るのである。否既に出來てゐるのである。殊に國難ある毎に神助により、伸びて來た日本である。晋公も和氣公も神助により國の危難を救ふたのである。儒教も佛教も基督教も大和魂にとけこんだのである。今や世界の舊態制は清算され、世界の新體制は芽生え、世界の新秩序は構成されつゝあるのである。而も新體制の鍵は神選民族日本人に與へられ、新秩序の扉は大和民族により開かれて行くのである。此の鍵、此の扉を把握するに重大なる意味を有つものが國教である。生長の家が萬教の一致を稱へつゝあるは、世界動亂中の一大炬火であつて、陸海軍が武力戦に絶大なる効果を奏してゐる如く、思想戦に大なる効果を上げつゝある事は識者の既に認めてゐる所である。國教を制定するには、時期既に到來してゐるのである。國論の統一も思想の根柢も國教の制定により確立されるのである。否國教は

既に存在してゐるのである。數千年の歴史は國教により生々發展して來たのである。只今日の急務は組織立てればよいのである。憂國の士が叫んでゐるやうに宗教亡國といふやうな事も單なる杞憂として葬る譯には行かない、此の問題については神祇院によつて研究の歩をすゝめていたゞく事を希望しておきます。

翼賛會に於いて宗教同盟が行はれるといふのは誠に結構な事であるが、えらい人が集まらると兎角對立し勝ちであるから、茲にも自我奉還が願はしい。而して南洋キリスト教の入つてゐる所ではキリスト教を善用し、タイ・ビルマのやうな佛教の盛な所では佛教を活用して、萬教の一致に導く事が必要であらう。今後の世界はどうなるか、其は決定的の事實である。此の肚と此の良心を持つて貰ひたい。此の重大なる意味から國教制定の研究程大事な事はない。否研究でない實現すべき秋でないでせうか。

第七十九議會に鶴見氏は近代戦は武力戦、經濟戦のほか思想戦があると考へるがわが國は米英に對していかなる用意ありやの質問に、首相はあらゆる方法で目的完遂にとめるといつてゐられるが、私は此の基礎根柢をなすものは、教育と社會事業と宗教の堅固なる鼎立が願は

しい。一言にしていへば民族の優良化を講じて貰ひたい。何ぜならば日本の武力戦に斯くも目醒ましき結果を見てゐる事は、大御稜威天佑神助の然らしむる所とはいひながら軍事教育が三十年何より一番徹底強化されてゐたからである事を銘記せられるからである。過去二、三十年間何が一番完備し行き届いてゐたかといへば軍事教育であつたのである。故に将来日本が世界的使命を達成完遂するには教育・社会事業・宗教の向上強化徹底を期せねばならぬ事を繰りかへし切望しておくのである。

天祐、保育、高世、一、皇作、天、大、不、存、因、  
天、皇、の、御、威、神、助、の、然、ら、し、む、る、所、と、い、ひ、な、が、ら、軍、事、教、育、が、二、  
十、三、年、間、何、が、一、番、完、備、し、行、き、届、い、て、ゐ、た、か、と、い、へ、ば、軍、事、教、育、で、あ、つ、た、の、で、あ、る、  
故、に、將、來、日、本、が、世、界、的、使、命、を、達、成、完、遂、す、る、に、は、教、育、・、社、會、事、業、・、宗、教、の、向、上、強、化、徹、底、を、期、せ、ね、ば、な、ら、ぬ、事、を、繰、り、か、  
へ、し、切、望、し、て、お、く、の、で、あ、る、  
新、島、新、塾、  
昭、和、十、八、年、一、月、八、日

昭和十八年一月八日

脇田良吉謹書

新島新塾  
昭和十八年十二月八日

しい。一言にしていへば民族の優良化を講じて貰ひたい。何せならば日本の武力戦に斯くも目醒ましき結果を見てゐる事は、大御稜威天佑神助の然らしむる所とはいひながら軍事教育が三十年何より一番徹底強化されてゐたからである事を銘記せられるからである。過去二、三十年間何が一番完備し行き届いてゐたかといへば軍事教育であつたのである。故に将来日本が世界的使命を達成完遂するには教育・社会事業・宗教の向上強化徹底を期せねばならぬ事を繰りかへし切望しておくのである。

天祐一保育... 昭和十八年一月八日

昭和十八年一月八日

臣 脇田良吉 謹書

### 第三篇

#### 一、御親拜と其の謹話

畏くも大元帥陛下には、大東亞戦争開始以來、萬機を贊はせ給ふ御事はいよ／＼繁きを加へさせ給ひ、御政務に、御軍務に御多端なる御日常は承るも恐懼の極みであるが、一昨年十二月より昨年十一月末までの開戦以來一ヶ年間に於ける行幸十三回、宮中三殿に於ける御親祭、御親拜三十四回、親任親補式三十九回、大本營會議、樞密院本會議への親臨二十五回、御陪食二十二回、延人員八百餘名、定例或は臨時の拜謁百五十四回、延人員四千名以上にも及び、また國務大臣の奏上二百回、御裁可を仰いだ上奏書類は實に九千七百件を數へ、その他帷幄上奏、宮相、内府、侍從長以下側近奉仕者の上奏等も數知れず、決戦下御躬を以て民一億を率ゐさせ給ふ畏き御精勵のほどは、拜承するにたゞ／＼恐懼感激の極みである。

如斯御中にも時局の愈々深刻なるに、御軫念あらせられ、昭和十七年十二月十二日の佳日、

豊受大神宮、皇大神宮に御参拜あらせられる、なにごとのおはしますかは知らぬ、たゞたゞ大御心のほど拜祭し奉り、涙流るゝありがたさの身に沁むを覺ゆるのみにて、殊に今回のごとき行幸は全く御先例なく、陛下には宮城御發轍以來、御嚴肅な上にも御嚴肅にわたらせられ、ただ神宮御参拜のみに大御心を注がせ給ふ御聖旨のほど洩れ承るだに畏き極みである。東海道伊勢路の御車中の御模様を拜承するに、陛下には御親拜を終へさせられるまでは車中賜謁、車窓賜謁等の御事もあらせられず、はからずも行幸を拜した、御道筋の民草にも御會釋を賜はらなかつた御由である。また京都御駐轡中は、勅使侍從御差遣の御沙汰、賜謁御陪食等もあらせられず、天覽地方物産御買上は申すまでもなく、關係府縣知事の民情御奏上の御聽取、御下問の御事もなく、十二日御親拜の當日の如きは、御嚴しき御潔齋を、霜凍る曉闇の皇宮ならびに、外宮内宮にて都合御三度も遊ばされ、ひたすら御淨身につとめさせ給うたやうに承る。驛頭一般有資格者の奉送迎もなく、東京驛發御の際も極めて少數の宮内官のみに限られ、その後御着驛の皇禮兩衛の儀仗隊もなかつたが、かゝるはし／＼に至るまですべて御親拜のみを御念頭に置かせ給ふ畏き敬慮が拜祭され、側近奉仕者は恐懼感激申上げてゐる。御親拜を終へさせら

れてからは殊の外天機御麗はしく京都に還幸、御寛ぎの御暇もあらせられず、午後五時三十分御はじめて行幸關係者に單獨拜謁仰付けられ、また十三日京都發御の御のち車中拜謁を仰付けられたのであつたと、一億民はまことに恐懼感激に堪へないのでありまして、有史以來かつてなき御事でございます。

#### 東條首相謹話

畏くも 天皇陛下におかせられましたは、曩に宣戰の大詔を渙發あらせ給ふや宮中において御親祭あらせられ、また神宮を始め奉り、全國の官國幣社に勅使を御差遣遊ばされて奉告祭を執行はしめられたのであります。然るにこの度畏くも聖駕を西に進め給ひ、親しく神宮に御参拜あらせられ、特に 皇祖大御神の大御前に御親ら御告文を奏せられ、御拜あらせ給うたのであります。

國家の重大事に際し神宮へ勅使を御差遣遊ばされて御奉告あらせられ、神助を仰がせ給ふことは古來の御例と洩れ承りまするが、今回の如く征戰の途中において神宮に行幸あらせられ、親しく 皇祖大御前に御拜あらせられましたる御事は、全く有史以來未だ曾てこれあら



ざる御事と拜承致してゐる次第であります。

謹みて惟みまするに、今回の御参拜は開戦以來正に一箇年、陸に、海に、空に曠古の大戦果を収めましたることを御奉告あらせられ、神恩に報謝の誠を效させ給ひ、且この戦局愈々重大なるの秋に當り、御躬を以て民を率ゐさせ給ふと共に、更に、皇祖神靈の御加護を冀はせらるゝ深き敬慮に出でさせられたる御事と拜察し奉り、洵に畏き極みであります。

私は内閣總理大臣として特旨を以てこの度の行幸に供奉を仰付けられ、神宮御参拜の盛儀を目の當りに拜するの光榮を得まして眞に恐懼感激に堪へませぬ。不肖ながら粉骨碎身、一層奉公の誠を盡し、以て宸襟を安んじ奉らんことを深く堅く期してゐる次第であります。

今や大東亞戦争第二年に入りまして、畏くも有史以來未曾有の御参拜を拜したのであります。茲に我ら一億國民は現時局の如何に重大なるかに想ひ到りますと共に、この有難き國體の眞姿を仰ぎまして、只々感奮興起するばかりであります。この上は我ら一億國民愈々益益一心同體、一切を擧げて國家の總力を大東亞戦争完勝の一點に集中し、以て聖恩の萬一に報い奉らんことを誓はねばならないのであります。(以上大阪朝日新聞より)

### 皇謨宏遠神光赫輝

京大教授文學博士 西田直二郎 謹記

顧みまするに、文永弘安の元の來寇は、當時の日本國家にとつては、まことに未曾有の國難でありました。文永三年、蒙古は高麗人を嚮導として、使を我が國に遣はさんとし、この時は風濤に妨げられてこれを果さなかつたが、翌四年我が國に來つた使節は、すでに威嚇的で、その國書の文には「兵を用ふるに至るは孰れか好むところならんや」との語が見えてゐたほどでありました。

鎌倉幕府はこれを見て決するところがあり、防備の事を謀り、朝廷に於かせられては、その翌年文永五年は後嵯峨上皇の寶算五十の御賀があらせらるべきでありましたが、これも御取止めになり、この時を以て伊勢の神宮に公卿勅使を御遣はしになり、宸筆の宣命を奉られ、御祈請になつたのであります。

この頃から元はしきりに恫喝的な態度を以て我が國に臨み、一方には第二回の使節を派遣す

ることを計畫し、他方には高麗をして、兵員、船艦を用意すべきことを命じ、高麗が兵一萬、船一千艘を用意したことを、元の皇帝に奏上したといふなどの事があり、全く日本を小國と視、威嚇壓伏せしめんとしたのであります。後嵯峨上皇が石清水八幡宮に詣でさせられ、國難を除かんことを御祈請になりましたのは、元が第三回目の使を出して我が反牒を迫りましたときであります。

かくて文永十一年の來寇の後、第二回の來寇である弘安四年は國家の艱難いよ／＼大なるときでありました。後宇多天皇はその六月宸翰を神功皇后の御陵等に奉られた事があり、閏七月一日の夜より二日の曉に於ては太政官に行幸あらせられて、異國擊攘の御祈りを親しく行はせられた。この日に於てこそ西海にあつては神風吹き荒び、賊船悉く漂没するに至つたのであります。まことに神威の灼然なるを拜したことであります。この事を記るしてゐます當時の壬生官務の日記には、「神力に於ては末代と雖感涙抑へ難き事なり」と書いてゐますのは、この時上下國民ひとしく感激したところであつたのであります。神宮への勅使の御發遣もこの時に行はせられたことでありました。龜山上皇が春日、日吉に行幸あらせられ、宸筆の御願文を神

宮に奉られ、御身を以て國難に代らせられんことを祈り給ひしと傳へられますのも、この御時のことでありました。

また近い時代にあつては、孝明天皇の御代も亦外憂が傳へられた時でありました。

すでに仁孝天皇の御代の天保十一年は、我が國にあつては紀元二千五百年の記念すべき年であり、孝明天皇はこの年を以て皇太子として御立ちになつた年でありましたが、東亞は風雲ただならぬものがあり、支那にては阿片戦争が始まつた年である。これによつて英國は香港を支那から奪ひ取り、上海、廣東等の五港を開かした。のみならず英國は戰勝の餘威を以て、我が國に近づき、軍艦を宮古、八重山の諸島に出して、その水域の測量をなし横暴を働いた。ついでには嘉永六年には米國水師提督ペリーが軍艦四艘を率ゐて浦賀に來り、また露國のブーチャチンが軍艦數艘を率ゐて長崎に來り、露兵が樺太久春古丹に上陸するなど、外警がしきりに傳へられた。

この時、天皇は深く宸襟を惱ませ給ひて、安政元年には伊勢、石清水、賀茂、松尾、平野、稻荷、春日、大原野、大神、石上、大和廣瀬、龍田、住吉、日吉、梅宮、吉田、廣田、祇園、

北野、丹生、貴布禰の二十二社、並に伊勢の伊雜宮、熱田、香取、鹿島、諏訪等の十一社に御祈請を仰せ出されたが、翌二年二月には神祇伯、白川資訓を神宮に御遣はしになりました。文久元年五月に權大納言廣幡忠禮を御遣はしになり、さらに文久三年三月に柳原光愛、橋本實梁が勅使として参向したのであります。

天皇は勅使の御派遣、御祈願執行の御時にあたられれますと、親しく内庭に出御せられて御祈請を致されましたが、また安政五年五月には夷船來襲、國家危急の時にあたり、宮中の諸費を節して専ら武備の一助に充つべきことを仰せ出されてをります。まことに畏き極みであります。

かゝることを惟みますとき、孝明天皇の御製

天が下人といふ人ころあはせ

よろづのことに思ふ友なれ

と詠ませられた御教旨を仰ぎ、今日の國家重大の時にあたつて、各人その力を合せその總力を擧げて國運隆昌のために盡すべきを誓はねばならぬと思ふのであります。(大阪毎日新聞)

## 二、聖戰と戰爭

### 日獨伊三國條約締結に關する大詔

大義ヲ八紘ニ宣揚シ坤輿ヲ一字ヲラシムルハ實ニ皇祖皇宗ノ大訓ニシテ朕カ夙夜咎々措カサル所ナリ而シテ今ヤ世局ハ其ノ騷亂底止スル所ヲ知ラス人類ノ蒙ルヘキ禍患亦將ニ測ルヘカラサルモノアラントス朕ハ禍亂ノ戡定平和ノ克復ノ一日モ速ナランコトニ軫念極メテ切ナリ乃チ政府ニ命シテ帝國ト其ノ意圖ヲ同シクスル獨伊兩國トノ提攜協力ヲ議セシメ茲ニ三國間ニ於ケル條約ノ成立ヲ見タルハ朕ノ深ク擇フ所ナリ  
 惟フニ萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンセシムルハ曠古ノ大業ニシテ前途甚タ遼遠ナリ爾臣民益々國體ノ觀念ヲ明徴ニシ深ク謀リ遠ク慮リ協心戮力非常ノ時局ヲ克服シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼セヨ

御名 御 璽

昭和十五年九月二十七日

聖戰とは宇宙創造のはじめより定められたる、人類共存共榮の活潑であつて、其の内容意味は畏れ多くも昭和十五年九月二十七日に演説された、日獨伊三國條約締結に際しての大詔と、昭和十六年十二月八日、米英に對する宣戰の大詔により拜察し得るのでありますが、民間に於ては昭和十四年一月二日より、十二回の長論文を以て提唱された、高嶋中佐の日本百年戰爭觀は深遠を極めてゐる。而して其の聖戰たる事は大東亞圖の戰果に於て、神人共に是認する所である。

然らば戰爭とは何か、米英兩國並に其の中間に介在して、世界制覇を夢みてゐる非人道的行動である。然らば何故に彼等は此の非人道的世界制覇を夢みてゐるか、其の遠因は歴史家の研究を要する所であるが、英國に對してはボース氏の放送をきかう。彼は英は人類の敵だ、クリップスに耳を藉すなど、其の對印放送要旨「かつて天下に呼號せる英帝國が日本ならびにその樞軸國家の打撃の下に、まさに没落せんとする世界歴史の一大轉換期に際して、英印關係が特に世界の耳目をそばだたせてゐるのは極めて當然なことである。インドを戰爭の渦外においてこれを守らんとするのは英國の根本政策である。そしてこの政策を實行するために英國は手段

を選ばず、無法にもインドに隣接する周圍の諸國、すなはちチベット、ネパール、香港、支那などの獨立を奪ひ去つた。また英國はその傳統的政策である分裂統治によつて、インドにおいて一つの共同社會を喚けて他の共同社會と争はせて來たばかりでなく、全世界にわたつてこの卑劣極まる手段を弄して自己の優越を維持せんとして來た。しかるに現在においてはこの種の術策もすでに效力を失ひ、その廣大なる帝國を確保することも不可能となり、今われ／＼の眼前に崩潰の過程をくりひろげてゐる。

この時にあたり、インド人諸君がまづ從來インドにおいてなされて來た有害なる英國統治の實績を考へ、かつこの統治を打破してインド人のインド、アジアのインドを建設すべき手段方法を見出すことは絶対に必要なことである。二百年以前における英國は一小國にすぎなかつた。しかも二百年後においては世界の一等國となり、その國民は最も贅澤な生活をし、最も豪華な衣服をまとひ、最も甘美な物を食ひ、さながら王侯の如くに振舞ふにいたつた。これはいかなる方法によつたのであらうか。すなはちインドに對する殘忍極まる搾取以外の何ものでもなかつた。英國のインド搾取の歴史は恐怖すべき記録となつて書殘されてゐる。英國が富めば富む

ほど、インドは逆に幾何級数的に貧しくなり、インド國民の大部分は飢餓に瀕する状態におかれた。もしかくの如き搾取がこれ以上繼續されるならば、疑ひもなくインド民族は過去のものとして葬り去られるであらう。」

次に東日副主筆楠山氏は、英國の外交、經濟、殖民地、食糧、米國との共同制覇の夢の各問題より英國の滅亡を論斷せり。殊に最近は悪虐鬼畜の英人として、京都新聞は昭和十八年一月七日【バンコック六日發同盟】インド獨立聯盟本部では、インドの食糧不足問題深刻化の真相とイギリス側の食糧對策の真相を暴露して、六日左の如き放送を行つた。

數百萬のインド大衆が餓死せんとしてゐるのに、冷酷極まる英人はインドの穀類をどん／＼國外に移出してゐる。この事實はニューデリーでも認めてゐるが、これは英人がインド大衆から食物を奪ひ取つて、これを海外に密輸する悪虐行爲の當の責任者たることを意味する。インド反英革命の過去五箇月間に、英は數千のインド愛國者を殺したが、飢餓による大衆殺戮計畫が今や全インド到るところに進められてゐる。殘虐且つ無情な英人も、パンジャツプ聯合州、ベンゴール、ボンベイ、マドラスなど各地方が深刻な飢餓に陥つてゐることを認めてゐる。イ

ンドでは最少限に見積つても二千七百萬トンの小麦、その他數千萬トンの食用穀類を生産してゐる筈だ。然るに額に汗を流してこれら穀類を作つてゐるインド大衆は、穀倉の中に居ながら食物を探し求めてゐるのだ。英人はこの矛盾した事實を目の前にしながら、インド人の食用穀類をどし／＼國外に移出してゐる。世界の五分の一の人口に對しかゝる極悪行爲を平氣でやるのは、殘虐と殺人鬼の化身ともいふべき英人のみである。インドに飢餓が起つたのは何故か。それは英人がインドにゐるからだ。それは英人がインドへ米兵を連れ込んだからだ。それは英人が東アジアから逃げて來た英人にめしを喰はせようとするからだ。それだけではない、英人が中亞や西亞の英の軍隊を養ひ、また後日英人がインドから逃げ出す時の用意に、イランやイラクに食糧を集めようとしてゐるからだ。英人のインドに對する態度は、一口にいへばインド人は英の暴壓に服し、さうして英の侵略戰爭を援助せよ。然らずんば死す覺悟を固めよといふのだ。」

げに英陸軍大將ロバーツは、シンガポールが世界の歴史を決する日がいつか來るであらう。と自信なつぷりで豪語し、更にシンガポールを失ふ時は、英帝國没落の時であると。果せる哉

淺き自信は其の通り實現するであらう。英よ世界の植民地を奉還せよ、汝に對する豫言は一、二ではない。

次に亞米利加に移らう、新聞の報する米國の侵略史を見よう。

ローマのジオルナーレ・デ・イタリー紙主筆ガイダ氏は其の社説に於て、ルーズヴェルト米大統領の演説を完膚なきまでに痛撃して、大統領は日獨伊三國を非難してゐるが、米國は過去においていかに條約を侵犯したか、其の二、三を擧げてみようと言ひ、メキシコ戦争テキサス及びハワイ征服、西印度人に對する壓迫、過去八回に亘つて南米諸國を侵略した事實をあげ、巧みにハワイを併呑、長驅ガム島に足場を作り、東への礎石を固め、パナマ共和國建設の裏面に小笠原琉球まで狙ひを逞うしたが、琉球及び小笠原の占領は不經濟なりとて放棄したのであると論じてゐるが、一體亞米利加の正體は、『大東亞戦争調査會研究初報告』による(大毎)松下正壽氏の所説には、米は徹底的の戰鬪民族であると斷じ、根本的に彼我の戦争目的を異にするとして、日獨伊を徹底的に武装解除をなさしめ、アングロサクソンの支配の世界を再建するにありといつてゐる。尙、獨裁ルーズヴェルト黨黒幕四十四人組の暗躍明躍するものは、猶太人な

りといふに至りては、地上惡鬼の集團、米國人こそよい迷惑である。さればこそ人面獸心の黒人私刑を平然とやつてゐるのは平時の事である。此の因果應報の秋は來たのである。

亞米利加にも不吉の豫言は多い。四十餘年前に桑港既に陥落せりなどいつた文献もあり、昭和十七年六月四日の京都新聞には、火の消えた米國小夜城を謳はれたブロードウェイも田舎街の暗さだといつてゐるが、それにつけて思ひ出されるは、余がニューヨークに滞在して罪の部は亡ぶべしとか、日米親善不可能だとか、二十年前の日誌に記入してゐるが、全く夢のやうである。亞米利加人には可なり思ひきりのよいものもあるが、今頃になつて日本は強いつか弱いつか、東京入城をするのだなどと血迷つた事をいはずに、よい加減に國土の奉還をしたらどうか。世界は神の物なのだ。金や人智で世界制覇を夢みても駄目なのだ。米人よ今日本の聖戰を見て聖旨の天に成る如く地に成らしめ給へと、神をあざむきし罪を悔ひ改むる事は出來ないのか。日本の聖戰こそ地上淨化の聖業なのだ。

## 三、神の化神と諸勇士

聖戦に應召された瞬間、其の身既に神の化神となり、其の心境に於て我といふ氣持は寸分認められないのであつて、所謂修道者が各種の形式を以て到達せんとする努力は何等顧慮を要せず、即妙境に達し得るのである。其の極地の達成者は靖國に祭らるゝ英靈のすべてである。就中昭和十六年十二月八日、大東亞戦の劈頭帝國海軍がその基地より渺茫六千キロの彼方に傲居する、アメリカ太平洋艦隊の根拠地ハワイ眞珠灣を奇襲し、敵米英は固より、諸外國を驚倒せしめた勇猛果斷なる特別攻撃隊九軍神である。今茲に平出大佐放送の一節を抄記して感謝の微意を表す。

## 平出大佐放送の一節

征くも残るも、送るも送らるゝも、感激悲壯の一瞬であつた。この時に及んでもなほ出で發つ勇士たちは自若たるもので、年若い一士官は「お辨當を持つたり、サイダーを持つたり、チョコレートをもらつたり、まるでハイキングに行くやうな氣がする。」と勇んで乗込んだといふ。

年若い勇士の胸の中に、その時チラツと幼かつた時のたのしい遠足の思出が浮んだのであらう。遠足のなつかしい思出に、胸ふくらませて勇士たちは雀躍死地に飛び込んだのである。あとでわかつたのであるが、勇士たちは身の廻りは整然と處理し、上官や同僚に對する謝恩の言葉や公務上の記録意見など書き残したものがあつたが、遺言らしいものはあまり多くなかつた。その中にある勇士の辭世がある。

君のため何か惜まん若櫻散つて甲斐ある命なりせば

いざ行かむ網も機雷も乗り越えて撃ちて眞珠の玉と砕けむ

靖國で會ふ嬉しさや今朝の空

これは勇士たち全員の感慨であつたと思ふ。この悟り、この信念、口にいふは決して難くはない。しかし勇士たちは黙々として身をもつてこれを實行したのである。大東亞戦争は實に形に現れた米英の暴戾な勢力を東亞から驅逐するとともに、眼に見えない「利己的唯物的米英觀念」を心から一掃することによつて、はじめてその成果を期し得られるものではあるまいか。勇士たちの行動はかゝる點からも好個の編鑑を示したものとといふことが出來よう。こゝに銘記

しなければならぬことは、かゝる己れを滅して國家に殉ずる犠牲的大精神は偉大なる母の感化によるところ大であることである。勇士たちはいづれも中合したやうに親孝行で有名であつた。それだけに母親が勇士たちを慈み育てた陰の力は絶大で、殊に家のため夫のため、子供のため己れを顧みずして働きつゞけ、そこに無上の幸福を見出す母親の献身的な精神感化が偉大な力となつて勇士たちの中に成長してゐたのである。かゝる偉大なる日本の母親なくして、どうしてこのやうな殉忠のますらをが生れよう。己れを空しく子供の中に生きる母親、すなはち國家の中に、きる母親である。顧みまするに神武天皇が「みいくさ」を率ゐて九州美津港を舟出し給うてより二千六百年、今につゞくこの逞しくも雄々しき大和魂！ その中に燃え続けるものは「海行かば水漬く屍、大君の邊にこそ死なぬ」の烈々たる心意氣である。

それは皇國日本の躍進とともにます／＼輝きを増し、時あらばその勇士達のやうに爛漫と咲き誇るであらう。特別攻撃隊の勇士達は、「軍の神」であると同時に「平和建設の神」でもある。大東亞戦争の後に來るものは世界永遠の平和でなければならぬ。そのときこそ軍の神は「平和の神」となるのであらう。

殊勳に輝く九勇士

- |             |                           |
|-------------|---------------------------|
| 岩佐 直治 中 佐   | (前橋市天川原九出身、二七年)           |
| 横山 正治 少 佐   | (鹿兒島市下荒田町二一二出身、二三年)       |
| 古野 繁實 少 佐   | (福岡縣遠賀郡遠賀村大字虫生津六二一出身、二四年) |
| 廣 尾 彰 大 尉   | (佐賀縣三養基郡旭村大字江島二七六出身、二二年)  |
| 横山 薫 範 特務少尉 | (鳥取縣東伯郡古布庄村大字法萬五五出身、二五年)  |
| 佐々木直吉 特務少尉  | (鳥根縣那賀郡上府村二五二出身、二九年)      |
| 上 田 定 兵曹長   | (廣島縣山縣郡川迫村大字藏迫八三九出身、二六年)  |
| 片山 義雄 兵曹長   | (岡山縣赤磐郡五城村大字矢知一二八五出身、二四年) |
| 稻垣 清 兵曹長    | (三重縣一志郡川合村大字庄村二八八出身、二七年)  |



滅私奉公とか没我奉公の眞髓は應召者のみの味ひ得べく、又實踐を誇り得るのであつて、疊の上の觀法やむづかしき公案に痛棒を喰ふやうな事では、所謂低級靈につかれたり野狐禪に陥る譯で恥かしき限りである。寧ろ法衣を脱ぎ袴を取つてモンペイ姿に増産奉公が願はしい。戦線の擴大につれ合掌すべき軍神は多い。至寶加藤を讃へらるゝ徳川中將談の一節を、昭和十七年七月二十三日大阪朝日より抄約する。

### 最高峰を行く武人、生死を超越した神技

「加藤のまへに加藤なく、加藤のあとに加藤なからん」と冒頭して、徳川好敏中將が語る「加藤建夫少將」……

**空前絶後の加藤** いま加藤少將戦死の報に接し痛惜の至りにたへない。自分と加藤少將の關係は校長と教官、兵團長と中隊長で、主として公務上の知合ひに過ぎないが、加藤少將が「航空の至寶」であつた事實については、航空人のすべてが認めてゐた。惜しい人を大空に捧げてしまつたものだ。戦闘隊長として、はたまた空中戦士として陸軍航空界に未だかつて加藤少將

のとき人はなかつたし、これからも果して加藤少將のとき人はあるひは出ないかも知れない。それほど偉い人であつた。少將は空中の御奉公を自己唯一の天職としてゐた。したがつて榮達は眼中になく、ひたすら空中のみで御奉公しようと努めてゐた。それだけに偉勳をたて、空に散つたことは本人にとつて満足なことであつたらう。こゝに少將の冥福を祈るとともに、少將の偉業が皇軍航空を護り、後輩の指導誘掖に貴重な賜となることを確信して疑はぬ。後輩は必ずや加藤少將を師表とし、「第一の加藤」、「第三の加藤」たらんと修養目標をたて、鍛錬することであらう。

**豪毅明朗、温厚謹嚴** 性格についていへば、加藤少將は豪毅快活、明朗にして温厚、身を持するに極めて謹嚴な人であつた。また上司につかへては忠實で、常に莞爾として命令に従ひ、決して自らを誇らない人であつたし、他人の言は素直に眞面目に聽入れる度量を持つてゐた。一方、下に對しては愛する事わが子の如く、その一舉手一投足に慈愛がみち／＼してゐた。そのうへ内地でも、戦場でも功を部下に譲つて決して自分を誇らなかつた。かういふわけだから上下の信望が厚く敬愛されてゐた。

**身機一體の神技** その技能は頭腦明晰で、身機一體の妙に達してゐた。空中戦闘の指揮技能および空中戦闘法の技倆は最も優秀であつて、果斷勇猛のうちにも緻密周到、日本戦闘隊の最高峰を行く人であつた。部下の教育もまたうまかつた。この卓越した技倆がその人格と相俟つて部下は悦服し神の如く敬つてゐた。従つて隊の成果は常に最高度に發揮されてゐた。加藤中隊をみるといつも「勇將のもとに弱卒なし」の感を深くした。つまり典型的な武人であつたのだ。

**周到な作戦計畫** なほ支那事變のはじめ頃、加藤少將が自分の部下として活躍した當時の面影を断片的に二、三偲んでみると……

加藤中隊の行動は兵團内でも敏速をうたはれ、戦機に應じて神速の妙を遺憾なく發揮してゐた。しかもその縦横の機動性は、死を超越して神技に近く、無理がなく法に合つてゐた。戦隊の團結も理想的に強固であつて、巡視の場合など加藤中隊に行くのが一つの楽しみであつた。ちよつと説明がむづかしいが、加藤中隊の雰圍氣に接してゐると、なんとなく一種の快感を覺えた。出動にあつての計畫の周到さについては、戦場の上空まで飛んで往つて復る時間と距離を計算し、その所要時間から戦場の滯空時間を割り出してゐた。つまり戦場の滯空時間が敵

機との交戦に使へる時間になる。割り出されたこの交戦時間に基づいて戦闘法、戦闘指導を立案し、その時間内に敵機をやつつける決心で出動してゐた。その一例は、洛陽の攻撃の時であつた。いつものやうに油の量と往復に要する時間を計算すると、戦闘時間は僅か十五分間しか残らない。そこで十五分間に敵戦闘機を叩きつける作戦でかゝつて行つた。豫定通り十五分間で完勝して最後の一滴をもつて全機無事悠々歸還した。航続時間に限度があるため、時間を無視した戦闘は、折角敵機を叩き落しても基地に歸れないことになるのである。この點加藤中隊は一見無謀とみえる位に勇猛果敢な戦闘を行つてゐたが、すべてかういつた周到な作戦がたてられてゐたのであつた。

**血も涙もある親鷲** また加藤少將の部下を想ふ愛の一端は、空中戦闘終つて歸還する場合、心ず部下の機数を確かめてゐた。身の危険を知つて最後まで杉野兵曹長を呼び捜した軍神廣瀬中佐を思はしめるのである。加藤少將が北支の戦場でよく語つてゐたことは、「部下が一機でも缺けると涙が出て仕方がない。基地に歸つても敵を撃滅した喜びはなくなつてしまふ。眞實に憂鬱です。歸る道すがら見あたらないその一機は先に歸つたのであらうと祈念しつゝ歸ります。」

といふ言葉であつた。血も涙もある親鷲だ、戦ひには勝つたが、陛下の赤子を一人失つてはといふ氣持の強い人であつたのだ。この氣持からであらう、この加藤中隊では全機歸つてきた時はいつも萬歳をあげてゐたが、一機でも未歸還がある場合はどんなに多數の敵機をやつつけた時でも萬歳をいはなかつた。そして加藤少將は泣いて報告をしてゐた。

また空中戦士の心構へとして加藤中隊では、各空中勤務者の遺髪を戦隊本部にとつてあつた。そして全員髪で故山へ歸るのだと固い決意をもつてゐた。戦隊の士氣を鼓舞する方法としては機の胴體に撃墜機數を鳥の羽根になぞらへたマークをつけてゐた。ついで戦果の報告のことであるが、加藤中隊の報告は實際の撃墜機數より少い場合が多かつたやうに思つた。そしてよく不確實何機といふのがついてゐる。これは煙を吐いて墜ちて行つたといふだけでは證據にはせず、必ず上空を飛び廻つて地上で燃えてゐる機數を一つ／＼確實に調べ、その結果に基づいて報告してゐたためだ。「加藤の報告は正確だ」と信頼してゐた。さうかといつて他の隊が正確だといふのではない。加藤少將は自分の眼で見とどけないと承知出来なかつたのだ。

**悲壯、戦死の心境** 最後に加藤少將戦死の時の悲壯な決意を偲ぶと尊いものがあると思ふ。

中隊長以下多くの部下戦死者を出した加藤少將としては、大東亞戦争で死ぬ覺悟をしてゐたのではないかと思ふ。死んで部下の英靈にあひたいと願つてゐたことであらう。戦場におけるこの心境は尊くも悲壯な心境だ。乃木將軍の心境と同じである。偉い武人であつた。

#### 四、必勝政治の確立

世界新秩序建設の太陽役を勤めてゐる我國が、必勝政治を確立されるといふ事は、一億民が安心して大政を翼賛し奉る事が出来るのである。昭和十七年二月頃の新聞によれば、我國に請願委員が出来てから、明治四十三年第二十六議會に桂首相が出席された例があるのみで、爾來幾萬の問題は盲腸的存在であつて、議會は下情の上通に甚だ冷淡で、全く自由主義、個人主義的で、所謂えらい人が羽振りをきかしてゐたものであつて、徳川幕府が大政奉還以來はえらい個人に移り變つてゐたのではなかつたかを思はせられるのであつて、政黨人が申譯ない罪惡であつたと、良心のひらめきを見たといふ事を風の便りにきいたのであるが、何といつても近衛さんの自我奉還、東條さんの我なき今日此の頃の生活は實に一億民に對する天祐神助である。

之れでこそ上に聖慮安んじ奉り、下一億民が政府の要人や翼政會並に翼贊會の諸賢に信頼して、外には健剛内に強靱なる祭政一致を期待し得るのである。

さて、必勝政治の確立に何が目論まれるであらうか、朝日新聞の主催にかゝる座談會の目標を掲げて今後の動行を樂しまう。

- 一、官僚意識を打破
- 二、翼贊會傘下産報の一層協力
- 三、翼壯の責務重大、機構改正前に個人を見直せ
- 四、翼政と翼贊の二を一に
- 五、率先者を名譽で酬い時間と人に斷行せよ

等にて、殊に正直な人が損をするといふ事になると、率先する人がなくなるといつてゐる。

尙、自我奉還の適例として、昭和十七年十二月二十六日東條首相の日本官吏訓を指摘すれば、「此の際、國民の陣頭に立つて専ら戦力増強の一途に邁進すべき官吏が統一せる思想の下に、足並を揃へて行政の運営に當ることが極めて肝要な事と思ふ。大東亞戦争第二年の當初において

特に次の三つの事を強調せんとするものである。一つには官吏は、天皇陛下の官吏である。二つには官吏は須らく率先して頭を戰時的に切り換へよ。三つには官吏は全責任を以て上司を輔佐し、己を空うして上司の命を實行せよ。」と。

### 五、文武一如と教育刷新

教育萬能といふ事は、余の青壯年を通じての標語であつた。今我國の陸、海、空軍の善謀勇戦必勝の偉功を見て、我國で一番よく行き届いてゐる事、完備されてゐる事は、軍事教育のみであると、多年信頼し感謝してゐたのであるが、今次の戦果によつて驚異的に實證された。之れは大御稜威の然らしむる所であり、天祐神助の賜物ではあるが、開戦以來發表されてゐる、我が陸、海、空軍の猛訓練の御蔭である事は、何人も無限の感謝をしてゐるのである。此の意味に於て世界新秩序の建設も亦教育の力は重大である。それならばこそ十八年度に於て教育事業が二十九件の優先的豫算の内七項目までの、國策として決定された事は誠に慶祝の至りに堪へないのである。

由來、我國の教育は古く文武天皇の大寶元年有名な大寶令の學制により始めたものであつたが、明治五年八月三日、劃期的な學制が頒布され、邑に不學の家なく、家に不學の徒なからしめん事を期せられ、明治二十三年十月三十日に教育勅語を御頒發になり、教育の目的を鮮明にされたが、爾來、歐米の教育學說濫入して一長一短の經過をたどつたが、其の間にも民族的底力を涵養して、今世界新秩序建設の先頭に起つたのである。併し教育は地下水的分野であるために始終國策の下積にされて來た感があつたが、天下の識者は此の空前絶後の重大時期に際しては捨ておけない事を悟つたのである。此の時に愚見をのべたいのは、教育の目的と方法手段を混同しない事である。我國では教育勅語で御示になつたやうに、教育の目的は神代から確定されてゐるのである。併し其の方法手段に於ては民族の生成發展によつて、年限でも教科目でも變更せねばならぬ。殊に新世界建設の今日に於ては、今日に適應した方法手段を執らねばならぬ。此の意味に於て、年限短縮の必要もあれば、又百年の大計も立てねばならぬのである。何れにしても教育の根本問題は教育者の問題である。故に此の際、格別に下は幼稚園より上は大學に至るまでの教育者に懇願いたしたきは左の信條である。

曰く、今後の教育者は、文武の兩道に精通し、適才教育の眞理を把握し、神人の一體觀に生き、教育對象者の體、技、智、德、靈をして強化増長せしむべく、誘導し以て世界指導者たる皇民の鍊成を天職とす。

尙、厚生事業として一言したきは、從來の社會事業としてやつて來たものは、國家の靜的事業の部面であつたが、それが厚生事業と改稱されてからは、國の生成發展を促すべきものであつて、活動的になつたのであるから、其の部面も多岐になつて來たが、爰には前編にも觸れておいた、百萬を計上する落伍兒童を總力化する事は小さな問題ではない事を附記する。

## 六、國教制定の機熟す

今や世界を通じて思想問題に頭をなやまし、武力戰と共に思想戰にも大勝を希求してゐるが、我國は武力戰に於て必勝を重ねつゝある如く、思想戰に於ても必勝を期し得るは國教が確定状態にある事である。併し確定だからといつて、只自然のまゝに放任すべきではなく、人事を盡す必要があるのである。此の必要に迫られて已むに已まれない思想の根本問題が國教問題なの

である。余が國教問題に顧慮を拂ふやうになつてから十年にもなるが、其の當時既に惟神會創立され、宗教結社として活躍し、機關紙國教さへ月刊されて、「惟神の大道を闡明し、國民各戸に眞の氏神並に祖靈を奉齋せしめ、以て國教を確立せん事を期す。」と斯の如く目的を鮮明に標榜して活躍されてゐる。又生長の家は大日本は神國であるとして、民心の光明化を計り以て各方面に偉大の効果を發揮されてゐる事は、識者の認識を深めてゐる所であり、政府にては神祇院の復活をなし、此の問題に深き關心を持つてゐられる事と信じてゐるのである。惟神會と生長の家の實現のみにも國教の制定は機既に熟してゐると思ふのである。のみならず今此の秋に實現しなければ、其の時期は容易に來ないと思ふのである。爰に印度の情勢を記して他山の石としよう。大毎、昭一七、三、二三に反英闘争八十年足並みの不一致が惱みとて、其の一節に、

インドが英國の恣意な分割統治政策に乗せられたのには、インド自體のうちにも原因があつた。それは人種、言語、宗教、階級制度の相違に基づく社會の複雑性であり、それによる民族運動の不一致である。そのうちでも、印總人口三億三千万のうち、六割八分を占めるヒ

ンヅー教徒と二割二分を占める回教徒の紛争、ヒンヅー教徒の利益を代表するとみられる國民會議派と回教聯盟の對立、インド總面積の二割四分をもつ土侯國の存在等は、インドの痼疾であるといはれてゐる。ヒンヅー教徒にとつて神聖冒すべからざる牛が回教徒の祭壇に費となることがある。ヒンヅー教徒はこれをブラーマの神に對する最大級の冒瀆として、回教徒への復讐を誓ふのである。ヒンヅー教徒の春の祭には綺麗に着飾つた老若男女が色水をかけ合つて喜ぶ習慣がある。たまたま祭見物に來た回教徒にその色水がかゝることがある。兩教徒闘争の原因はかゝる宗教的習俗の相違に基づくものであるが、これに國民會議派と回教聯盟の對立が絡まつてゐる。回教聯盟の立場は多數種族(ヒンヅー教徒を指す)の専制反對、回教徒社會の自由獨立を掲げ、反英闘争よりもヒンヅー教徒に鋒先が向けられてゐる。國民會議派がヒンヅー教徒の利益を代表する傾向は否めないが、その主要目標は反英獨立運動であつて、國民會議派にも回教徒は多數參加してゐる。回教社會の代表者ムハメット・アリも神の支配する世界においては、われ／＼はあくまで回教徒であるが、事インドに關してはあくまでインド人であり、インド人以外の何ものでもない。」といふことを述べてゐる。それゆゑ

獨立運動に關する國民會議派と回教聯盟の對立云々には、全インドの輿望を擔ふ國民會議派の獨立運動を攪亂し、過小評價せしめんとする英國の宣傳が多分に含まれてゐることを知らねばならぬ。なほヒンヅ、回教兩教徒の黨派として少數黨であるが、ヒンヅ・マハサバ黨とカクザール黨の活躍も見逃せない。ヒンヅ・マハサバ黨は行動本位のヒンヅ教團體で、その反英態度は頗る積極的である。カクザール黨は回教聯盟の微溫的態度に弓を引いた回教徒團體で、英當局では同黨をナチス第五列として彈壓を加へてゐる、と。

支那事變勃發以來時局に便乘して、多くの宗教家中には自己の宗教を國教にと考へた人もないではなかつたやうだが、我が國教は既定の事實で人爲を以て左右する事は出來ないのである。征戰第二年をむかへて佛敎全宗派から、四十師の勤皇僧傳を顯彰しようとしてゐる。又京都佛敎會の肝煎で、一月八日各派管長揃つて伊勢神宮に參拜され、又基督教は基督教で一致團結し奉公の誠を盡さうとしてゐる。殊に文部省情報局大政翼賛會の後援により神佛基を一丸とする宣誓が行はれた。如斯皇室中心、天皇信仰に生き、天照大御神に還元し奉るは、日本皇民に秘められたる自然の法則であつて、惟神の大道に復歸する一大現象である。茲に國教制定の健

健は存在してゐて理窟ではないのであつて、今や佛敎も基督教も回教も惟神教に抱擁されてゐるのである。之れ以外世界平和の道はない。之れ以外思想の統一はない。之れ以外に二十億の人類を統一し、極樂淨土を來らす道はないのである。爰に余は政府の要人が今後の十年を期して國教の制定を完成されん事を切望してやまないのである。

### 七、三たび自我奉還を説く

今茲に自我奉還を三たび説くに當りて、自我奉還は先づ京都からといふ氣持に打たれるのである。何ぜならば大政奉還が京都で行はれたといふ事であるからである。之れは必ずしも無意味ではない。西田直二郎博士の大政奉還と二條城といふ題目についてどうかへば、左の如くである。

さて大政奉還前の天下の形勢を知り、慶喜が何故この二條城にて大政奉還をするに至るかといふことを知るには、先づ何よりも岩倉公遺蹟保存會に保存せられてゐる岩倉公自筆の「叢裡鳴蟲」には公の時世の意見書を見るを適當とする。これには文久、慶應の時代の狀況が細かに

書かれてある。これは岩倉公が井上右近に託して薩州の小松帶刀、大久保一藏に出したものであるが、これによると時代匡救策として一には家茂將軍の上洛、二には五人の大藩主を選んで相談役にする事、三には一橋慶喜を將軍の後見役とする事の三大策が書かれてゐる。これ岩倉公が前途をハッキリと見た策である。幕府が安政の條約を結び、井伊大老が櫻田門外に墜れる暗澹たる状況の裡にである。文久六年島津久光が大原重徳卿に随つて江戸に下つて幕府に改革案を申し入れたが、これにもこの三大策が同じやうに見えてゐる。

この時代は歐洲には普墺戦争が勃發したときであり、ドイツのビスマルクが普國の宰相となり、鐵血政策に着手し始めた時である。英國はインド政策に手を出し、手を支那から帝國にまで伸べんとしてゐた。米國は太平洋政策に乗出し、カリフォルニアの金鑛發見に、つゞいては太平洋の制覇を考へ、アラスカ、アリューシャンを露國から買取り、皇軍の今日活動の北邊に既に手を出してゐた。フランスのナポレオン三世は帝國政策をもつて遠くメキシコの政局に介入し、又日本に貿易、交通を策し、之により國內の人氣をとり、日本では幕府はフランスと、薩摩は英國と結ぶといつた、まことに重大な形勢が醸されつゝあつた。

大政奉還は單に徳川幕府の廢絶のみではない。我々が當時の事を回想する時、この大政奉還に於て如何に人々が世界に恥ぢざる日本なるものを考へたかゞ判る。世界的意識と上下の和睦と協力同心がこの時大政奉還に際して強く考へられたことである。内外の情勢を判斷し、難局の打開として考へたことは今日の精神と異なるところはない。

今次大東亞戦と大政奉還の精神と大いに通するものがあり、大なる教訓がこれに含まれてゐる。我々國民は、京都市民は二條城を又大東亞戦争完遂の精神の史蹟として觀、且つ深く慮らねばならぬ、と。

明治維新が大政奉還によつて出来上つたやうに、昭和の新體制は自我奉還によつて整備されるが、大毎、昭一七、一、一四の社説に、新體制は各部門出揃ふといつて、形式的に整つたこの戦時體制をどうして活かすかゞ、これからの問題である。無論すべての方面でよくその職責を果すべきを希望する。しかし特に官界において、その新體制が内容的にも實現するかどうか、が重點であるやうに思はれる。まづセクシヨナリズムが捨てられて、例へば共管事務について無意味なる對抗がなくなることである。これさへ巧く行けば權限委讓なども手早く片付き、そ



のことが同時に民間の新體制を育成することになるのである。また南方に澤山の人手が要り、時局は事務の澁滞を許さないのだから、行政簡素化もある程度は成功するに違ひない。しかしこれまでの考へ方や事務の執り方を急に變更することは容易なことではないのである。高い斷崖から一足飛びに飛び降りるときの勇氣が要るのである。この勇氣は官吏の責任觀念を根本的に變へることから始めないと湧き出ないのである。従來の官吏の責任は過誤や失敗に對するものと解釋され、官吏はその防衛に専念した。これからの責任はそんな消極的なものではない。事業の成否もしくは能率に對する積極的責任を負ふのである。この新體制理念がまづ官界から發して、民間新機構に普及すれば占めたものである。形式的に出來上つたわが戰時新體制に生命を與へ、内容を盛るものは一つにこの點だと思ふ。」と結論してゐる。

茲に本編の結びに近づいたから、愛讀誌反共情報より二、三の重要提唱を摘載して讀者の考慮を促しておきます。

一、昭和一七、一一、七、阿部隆一氏は革新運動に於ける思想改革と經濟改革といふ長文の一節に、民族の危急存亡に没我挺身し、民の苦難を誠心より案じ、水火も嫌はず社稷崩壞の禍

源を爰除して、國家永遠の隆盛をはかる英雄的精神に目覺め、燃え立つ志士仁人の奮起その影響感化令活より捲き起さるゝ民心一新の息吹きのみが眞の革新である。

二、昭和一八、一、七、時子山常三郎氏は第三次元的空間の支配決戰時代の標題にて、闇取引、贈收賄、諸遊興施設の抹殺を痛論し、其の結論に第三次元的空間支配の時代には戰場は一つである。銃後も亦戰場である。銃後も戰場であるとすれば、銃後のものも亦第一線將兵と共に在るの覺悟であるのでなければならぬ。私はこゝに之を強調するのは、この第三次元的空間支配の戰爭が敗者にとつて何を意味するかを考へるからである。アメリカの戰後問題研究會は何を政府に建言してゐるか、かくの如きは固より笑止の沙汰であるとしても、殊に其の六七項において、聯合軍による日本本土、少くとも六大都市の占領駐兵、陸海軍高級將校、官吏、新聞社、産業指導者の處刑とまでいつてゐるのである。聞くに堪へ難き無禮のうちに、彼等の戰爭遂行に對する決意を語つてゐるのである。このやうな敵國の暴言を聽いて刻下のわが現狀を顧みて痛憤しない者は、恐らく日本人ではないであらう。われわれは決戰また決戰に一切を捧げるのでなければならぬ。

三、昭和一七、九、七、九月號に皆川治廣氏は大東亞新興文化の建設と惟神の大道といふ課題の數節に曰く。

自我を單位として一切を相剋に觀する傾向強烈なるが故に、其の哲學は其の宗教と共に自我を主として一切を思惟し、自我と他我、個體と普遍の關聯乃至其の相剋をのみ想するに止まり君父を貫いて神に通ずる祖孫一體無窮の發展と其の眞髓たる生成化育の親心の發揮が人類の奪ふべからざる天稟の性たるを發見する能はず、人間は總て皆自我の爲めに存するものなりと觀する傾向強く、其の主我的傾向の過度の發展を制約せんとして論理するものなきにあらざるも實現に難く、辛うじて基督教の信ぜられたりし間は献身の聖者を見る事を得たりしも、現代人は天國に興味を感じず、其の爲め基督教の著しき後退となると共に、其の思想は甚だしく倫理性を喪失して其の昔の蠻族性を發揮し、財物の爭奪を第一義と爲すにあらざれば、力の制壓を以て秩序の必須要件なりと爲して、主義又主義の亂立を生じて階級的にも國際的にも將又個人的にも、鬭爭相剋の無限なるべきを想せしむ。

眼前に視る修羅混亂の此の西洋文化と、今は雌伏の状態にある東洋文化とを修理固成して、

之を人類の天性に歸一せしめ、依つて以て萬國の民に其の所を得しめ、萬邦各々其の長を發揮して八紘一宇の親和協力により、相共に無窮に發展する所以の道を開くとしては、人間元來自我の爲めに存するにあらず、祖孫一體無窮なる大生命の爲めに、我は只其中繼者としてのみ生を享けて存するものなる事を、體得せしむる惟神の大道の顯揚により、世界の萬民をして其の人生觀乃至其の世界觀を新たならしむるより先なるはなし、爰に大和民族の神より享くる崇高莊嚴なる重大使命の存するあるを觀ず、之を先づ東亞の諸民族に施すべしとなす。

願れば、神武天皇惟神の大道に依り天業を経綸あらせられたるの故に、一世無窮の玄妙は世界に冠たる日本國體を現出し、又萬邦に卓越せる日本國民の性格を生じ、英米の強調せる人種の衝突乃至文化の衝突を惹起せる現代に當面しても、日本國民をして嚴然として祖國を防衛するのみならず、進んで新興大化を創建して世界の人類を向上せしむる所以の素質を稟有せしめ給ふ。靜思して皇恩の洪大無邊なるを拜し奉る。

以上にて本編の終了としたいのでありますが、事變以來時にふれ折りに觸れて、大日本日の丸會の掲示板に掲示したる警句の二、三を記して本編の結びといたします。

一、油断するな、陶醉するな、勝つて兜の緒をしめよ、總力戦はこれからだ。

二、國內戦場の心構 國內戦場の心構をなすべき秋は來ました。此の時なくして世界の新秩序は建設されないであります。此の重大時期に一億民は、

聖戦必勝是天則 といふ確信を堅持して下さい。今かりに世界を相手にしても、必勝完遂は事實なのでありますから、況んや樞軸國との共同聖戦ですもの、此の信念を徹底的にたぎらせつゝ一億民は、

承詔必謹自我奉還 の心境に没入し、一滴の水一片の紙屑もお國の預かり物であつて、戦線に立たるゝ勇士が、**全身全霊**を献げられてゐられるやうに、銃後にあるものもすべてを私する事なく、それ〴〵の職域に勇躍奮進して而も時は生命なれば、一秒も無駄のないやうに、

時の善用 を唯一の金言となし、感謝と希望に明かし、反省にその日その日を送りませう。一億の同胞、縦に横に心と心手と手を取り合つて、萬歳連呼の有終美をむかへませう。之が日本民族に課せられた運命であり大使命だから。

### 三、大詔奉戴

自我奉還

壹億一神

(昭一八、二、八)

ミシンのところから切取りよく見える所へお貼り下さい。

時 の 善 用

聖戰必勝是天則

承詔必謹自我奉還

壹 億 一 神

432  
191

昭和十六年三月廿五日 初版發行  
昭和十七年二月十一日 再版發行  
昭和十八年二月十七日 三版發行

【非賣品】

不許  
複製

編輯兼 發行者 京都市上京區北鷹峰町一番地 協 田 良 吉  
印刷者 京都市下京區坊城通五條下ル 久 保 田 光 好  
印刷所 京都市下京區坊城通五條下ル 大内印刷所(西京製本)

發行所 京都市上京區北鷹峰一番地 白川學園内  
大 日 本 日 の 丸 會

終

